

東九州自動車道(都農～西都間)関連 埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅴ

平成16年度



炭化木製品(湯牟田遺跡)

2005

宮崎県埋蔵文化財センター

序

本書は、日本道路公団九州支社の委託により、宮崎県教育委員会が実施しております東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地にかかる埋蔵文化財発掘調査の概要報告書第5集です。

当該区間の発掘調査は、平成11年度から継続して実施しており、本書では平成16年度に実施した20遺跡における本調査及び確認調査の調査概要を収録しています。

今年度は、高鍋町・新富町内に展開する新田原・三財原といった洪積台地上に立地する遺跡から川南町を中心とする尾鈴山東麓の台地上の遺跡へと発掘調査の重心が大きく移ったことが大きな特徴といえるでしょう。

なかでも川南町内の遺跡では、主に弥生時代の集落跡が多数確認されており、溝をめぐらす墓も調査されました。弥生時代における人々の生活や社会のあり方を生き生きと描き出すことのできる重要な情報を秘めていると考えられます。

このように、どの遺跡も遺跡が所在する地域の歴史を解明するために重要な情報を雄弁に語りかけると認識しており、調査時から現地説明会や調査報告会等で状況を広く地域住民に公開するよう努めております。

ここに報告する内容が、学術資料となるだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査に当たって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成17年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 宮園 淳一

例 言

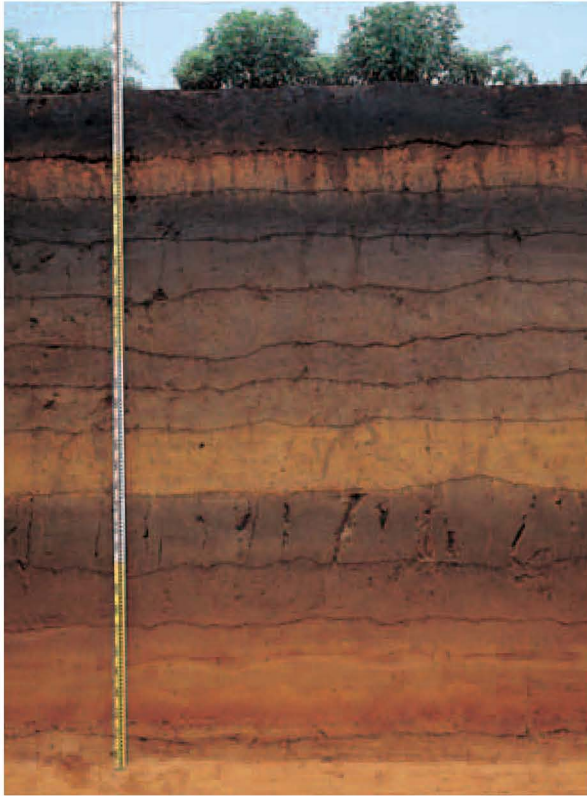
- 1 本書は、平成16年度に実施した東九州自動車道（都農～西都間）建設工事に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査概要報告書Vである。
- 2 発掘調査は、日本道路公団九州支社から委託を受け、宮崎県教育委員会が実施した。
- 3 本書の遺跡位置図（第1図）は、国土地理院発行の1/50000の図をもとに、それを縮小して作成した。
- 4 本書に記載された遺跡の調査内容・成果は、平成16年12月末現在で把握しているものであり、今後の調査・検討の結果、変更する点が生じる可能性がある。
- 5 本書で用いた標高は海拔高である。方位は基本的に座標北（G. N.）であるが、一部磁北を示す。磁北についてはM. Nと明記した。
- 6 本書の執筆は、各調査員が分担して担当した。なお、執筆者名を文末に示した。
- 7 本書に使用した実測図等の作図・浄書及び掲載した写真の撮影は各遺跡の調査担当者がおこなった。
- 8 本書で使用する遺構の略号は以下のとおりである。

SA	竪穴住居	SB	掘立柱建物	SC	土坑	SD	土壙（墓）
SE	溝状遺構	SG	道路状遺構	SI	礫群・集石遺構		
SL	周溝状遺構	SM	周溝墓	SX	不明遺構		
- 9 本書の編集は谷口武範のもと、今塩屋毅行、森本征明、岡田 諭及び金丸琴路が補助した。
- 10 調査の記録類、各遺跡の出土遺物は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。



川南町 唐瀬原段丘面(十文字扇状地より北を望む)

巻頭図版2



新富・高鍋方面の基本土層(東畦原第1遺跡)



川南方面の基本土層(中ノ迫第1遺跡)



旧石器時代礫群(中ノ迫第1遺跡)



縄文時代早期集石遺構(藤山第1遺跡)



縄文時代早期環状配石遺構(野首第2遺跡)



弥生時代焼失住居全景(湯牟田遺跡)



弥生時代方形周溝墓(赤坂遺跡)



弥生時代花卉形住居全景(赤坂遺跡)



古墳時代後期の竈付住居全景(宮ノ東遺跡)



同 近景(宮ノ東遺跡)



古墳時代～古代の集落(宮ノ東遺跡)

巻頭図版8



布掘りの総柱建物(古代)



溝状遺構群(中世)



石敷遺構と段切り面(中世)



石組遺構(中世)

宮ノ東遺跡における各種遺構全景(古代～近世)

イネ(①~④)



①~④ 向原第1遺跡
SA1出土



ササゲ属(⑨~⑫)



⑨~⑫ 向原第1遺跡
SA3出土



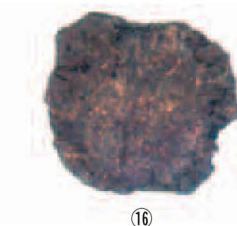
コムギ(⑤~⑥)



⑤・⑥ 前ノ田第1遺跡
(三次) SL1出土



イチイガシ(⑬~⑰)



⑬ イチイガシ種実
湯牟田遺跡
(二次) SA10出土

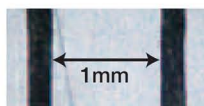
⑭・⑮ イチイガシ花柱
向原第1遺跡
SA1出土

⑯・⑰ イチイガシヘソ
向原第1遺跡
SA1出土

アワ(⑦~⑧)



⑦・⑧ 前ノ田第1遺跡
(三次) SL1出土



※スケールの1目盛は、それぞれ
1mmである。

フローテーション作業により検出された植物遺存体



フローテーション作業風景



選別作業風景



アワ
前ノ田1(三次) SL1



イチイガン
湯牟田(二次) SA10



イネ
向原1 SA1



イチイガン ヘソ
向原 SA1



コムギ
前ノ田1(三次) SL1



ササゲ属
向原 SA1

植物遺存体拡大写真

目 次

- 巻頭図版 1 : 川南町唐瀬原段丘面 (十文字扇状地より北を望む)
巻頭図版 2 : 上段 新富・高鍋方面の基本土層 (東畦原第 1 遺跡)
川南方面の基本土層 (中ノ迫第 1 遺跡)
下段 旧石器時代礫群 (Kr-kb : 中ノ迫第 1 遺跡)
巻頭図版 3 : 上段 縄文時代早期 集石遺構 (藤山第 1 遺跡)
下段 縄文時代早期 環状ピット群 (野首第 2 遺跡)
巻頭図版 4 : 弥生時代 焼失住居全景 (湯牟田遺跡)
巻頭図版 5 : 上段 弥生時代 方形周溝墓 (赤坂遺跡)
下段 弥生時代 花卉形住居全景 (赤坂遺跡)
巻頭図版 6 : 上段 古墳時代後期の竈付住居全景 (宮ノ東遺跡)
下段 同 近景 (宮ノ東遺跡)
巻頭図版 7 : 古墳時代～古代の集落 (宮ノ東遺跡)
巻頭図版 8 : 宮ノ東遺跡における各種遺構全景 (古代～近世)
上段左 布掘りの総柱建物 (古代)
上段右 溝状遺構群 (中世)
下段左 石敷遺構 (中世)
下段右 石組遺構 (中世)
巻頭図版 9 : フローテーション作業により検出された植物遺存体
巻頭図版 10 : 上段左 フローテーション作業風景
上段右 選別作業風景
下段 植物遺存体拡大写真

第 I 章 はじめに	1
第 1 節 発掘調査の経緯	1
第 2 節 調査組織	2
第 3 節 基本層序	8
第 4 節 遺跡の立地と環境	9
第 5 節 整理作業	11
第 6 節 現地説明会等	12
第 II 章 確認調査の結果	13
市納上第 3・4・5 遺跡	13
中ノ迫第 4 遺跡	15

第Ⅲ章 本調査の結果 16

市納上第1遺跡	16	天神本第2遺跡	18
大内原遺跡	20	中ノ迫第1遺跡	21
中ノ迫第3遺跡	24	赤坂遺跡	25
国光原遺跡	28	湯牟田遺跡(二次)	30
西ノ別府遺跡	34	尾花A遺跡	35
野首第1遺跡	37	野首第2遺跡	39
東畦原第1遺跡(四次)	46	勘大寺遺跡(二次)	48
尾小原遺跡(三次)	50	藤山第1遺跡(二次)	51
宮ノ東遺跡	53		

第Ⅳ章 まとめにかえて 57

第1節 旧石器時代	57
第2節 縄文時代	58
第3節 弥生時代	59
第4節 古墳時代・古代	60
第5節 中世～近世	61
第6節 植物遺存体研究の成果と課題	61

表 目 次

表1 東九州自動車道(都農～西都間)関連遺跡一覧	4
表2 東九州自動車道川南町域基本層序(新富・高鍋町域との対応関係)	8
表3 整理作業を実施した遺跡	11
表4 現地説明会等実施状況	12
表5 市納上第4・5遺跡基本層序	14
表6 宮ノ東遺跡遺構・遺物一覧表	55
表7 東九州自動車道(都農～西都間)植物遺存体集成表	63
表8 後期旧石器時代～縄文時代早期相当層における各遺跡の状況	64

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査の経緯と概要

東九州自動車道は、北九州を起点とし福岡、大分、宮崎、鹿児島4県の東海岸部を南北に走る約436kmが予定され、宮崎県では延岡～清武間が平成元年に基本計画が決定された。西都～清武間については平成7年度から発掘調査が始まり、平成13年度にすべての遺跡の報告書刊行が終了した。道路については平成12年3月25日に清武JCT～宮崎西IC、平成13年3月31日に宮崎西IC～西都ICまでの供用が開始された。

また、門川～西都間59kmは、平成9年12月国土開発幹線自動車道建設審議会において整備計画区間に決定した。そのうち都農～西都間約25kmについて、同年12月に建設大臣（現国土交通大臣）より日本道路公団へ施行命令が発令された。

一方、県教育委員会では、平成6年度に延岡～西都間の分布調査を実施し、整備区間決定後の平成10年度には都農～西都間の路線上を対象とした詳細な分布調査を行い、79遺跡896,000㎡の埋蔵文化財包蔵地の所在を確認した。そして平成11年度から日本道路公団九州支社と宮崎県教育委員会との間で委託契約を締結し、宮崎県埋蔵文化財センターが用地買収の進捗に合わせ確認調査・本調査および整理作業を実施している。調査は、平成11年度に新富町の尾小原遺跡、向原第1遺跡、西都市の宮ノ東遺跡の3遺跡の確認調査で始まり、平成16年度末までに55遺跡、約726,000㎡の調査終了を予定している。なお、門川～日向間についても、平成16年11月1日に延岡工事事務所が開設され、同年11月18日には道路整備計画や用地取得、埋蔵文化財調査等の調整会議も開催された。

平成16年度の調査は、確認調査18遺跡、本調査20遺跡で実施した。確認調査については、調査対象区の10%を目途に遺跡の範囲・性格・文化層の状況などを把握するために行っているが、中には土取りなどにより消失し、本調査の必要にない遺跡も見受けられ、そうした遺跡については、トレンチ配置図、出土遺物や土層の状況等の調査結果を本概報に掲載している。



写真1 国光原遺跡調査指導
(広瀬・柳沢・小畑・本田委員)



写真2 湯牟田遺跡調査指導
(泉・田崎委員)



写真3 確認調査状況（藤山第1遺跡）

本調査の主体は前年度までの新富町・高鍋町から北部の川南町に移行し、来年度以降都農町の遺跡についても順次本調査に入る計画である。調査内容についても新富・高鍋町では縄文時代早期や旧石器時代が主体であったのに対し、川南町尾花A遺跡・湯牟田遺跡・赤坂遺跡など弥生時代集落の調査も増加してきた。尾花A遺跡では弥生時代終末から6世紀後半の大規模な集落が、湯牟田遺跡では焼失家屋が多く検出され、その内の1軒から炭化した木製鋤も発見された。また、赤坂遺跡では弥生時代終末頃の周溝墓および集落が調査された。このような状況のなか調査指導委員の先生方からは、「複数の遺跡が隣接し、長大なトレンチ調査の様相も見られることから遺跡相互の連携を深め集落間のネットワーク、各集落の性格・役割を検討する必要性」・「遺構検出をはじめ遺構掘削・遺物取り上げなど調査方法に関する助言」などの指導を受けた。ほか注目すべき遺跡として、川南町中ノ迫第1遺跡では、AT下位から石器や礫群が、西都市宮ノ東遺跡では弥生時代から近・現代まで連綿と集落が形成され、石帯や円面硯、軒平瓦なども出土している。そのほか、藤山第1遺跡ではアカホヤ中から、第二次世界大戦末期の米軍の20ポンド爆弾の羽根部分が発見され、戦闘の激しさを窺い知れる資料も得た。

整理作業は、前述したようにこれまでの調査では旧石器時代の調査が多く石器・礫の接合を主体的に行い、実測・製図については業務委託し報告書作成の早期刊行を目指している。また、遺構内の土壌の水洗作業を行い、弥生時代の遺構内からイネ・コムギ・アワなどの炭化種子が発見され食生活の状況も除々にではあるがみえてきた。報告書は13遺跡について刊行し、高鍋町青木遺跡について当初、地区名を参考とした命名であったものを小字名を優先させ崩戸（くえと）遺跡と変更した。さらに普及活動として湯牟田遺跡などで調査成果を一般の方々にいち早く公開するため現地説明会等の開催や児童・生徒の体験発掘等も実施した。

(文責 谷口武範)

第2節 調査組織

調査組織は次のとおりである。

調査主体 宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長 宮園 淳一

副所長兼総務課長 大藪 和博

主幹兼総務係長 石川 恵史

副所長兼調査第二課長 岩永 哲夫

調査第一課長 高山 富雄

調査第一課第一係長 谷口 武範

調査第一課主幹兼第二係長 長津 宗重

調査第一係

安藤真二 大山博志 永山博一 鶴戸周成

山田洋一郎 竹田享志 安藤正純 阿部直人

小山 博 高橋浩子 興梶慶一 藤木 聡

松本 茂 松元一浩 重留康宏 立神勇志

大野義人 森本征明 渡辺美幸 金丸琴路

調査第二係

永田和久 大村公美恵 原田茂樹 吉富俊文

安藤利光 長友久昭 藤本典昭 吉本正典

戌亥浩志 河野康男 白地 浩 島木良浩

今塩屋毅行 堀田孝博 嶋田史子 岡田 論

小宇都あずさ 三品典生 福田 聡

調査員（囑託）

松尾有年 高木祐志 金丸史絵 黒木 修

福田光宏

東九州自動車道発掘調査指導委員

小畑弘己（熊本大） 泉 拓良（京都大）

田崎博之（愛媛大） 禰宜田佳男（文化庁）

広瀬和雄（国立歴史民俗博物館）

本田道輝（鹿児島大） 柳沢一男（宮崎大）

（五十音順）

調査指導・協力等

有馬義人・有田辰美（新富町）

石野博信（徳島文理大）

釜瀬明宏・津曲大祐（西都市教育委員会）

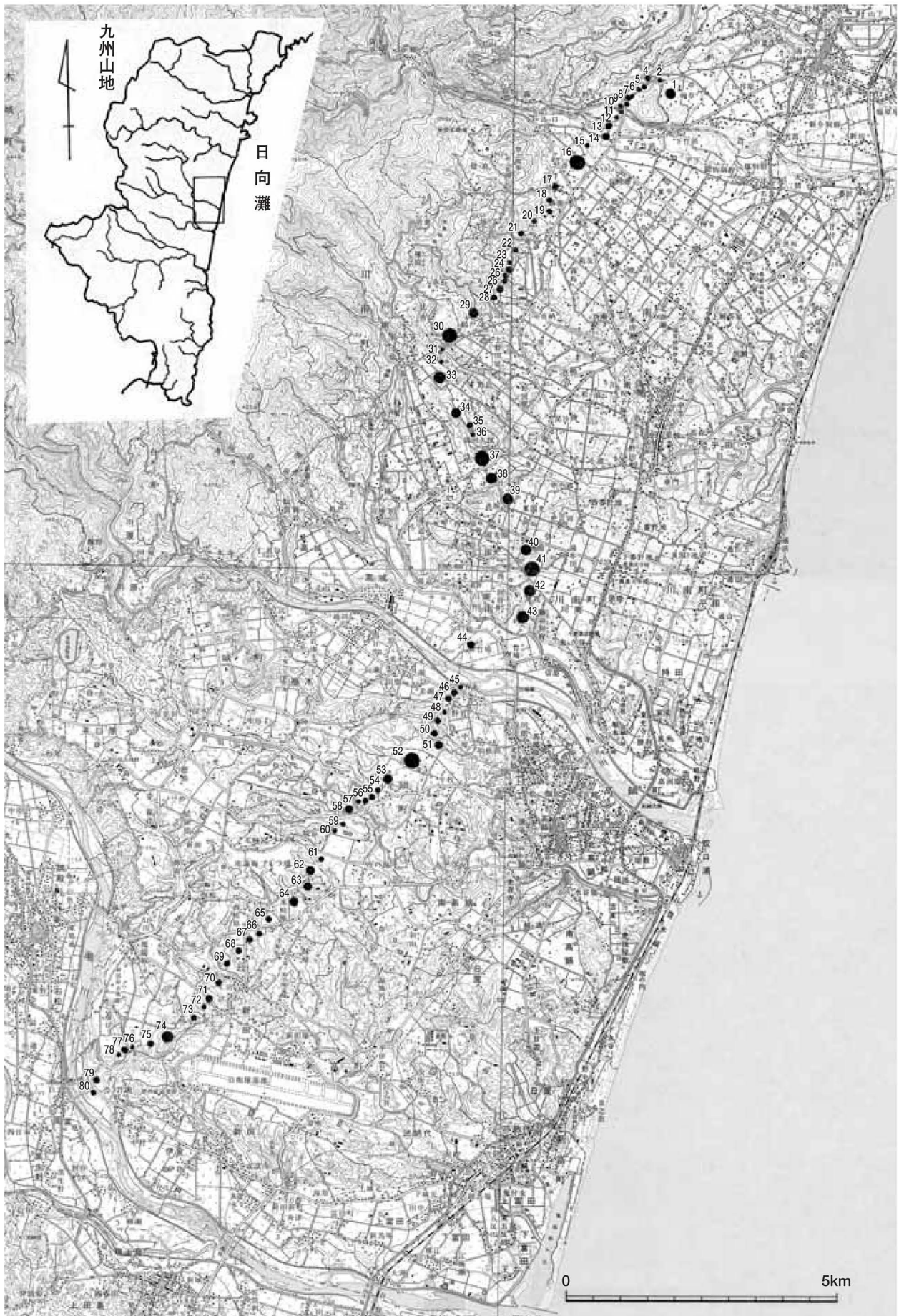
肥塚隆保・高妻洋成（奈良文化財研究所）

島岡 武（川南町教育委員会）

日高正晴（宮崎県文化財保護審議員）

山中 章（三重大） （五十音順）

（文責 今塩屋毅行）



第1図 東九州自動車道(都農～西都間) 関連遺跡の位置

表1 東九州自動車道（都農～西都間）関連遺跡一覧

市町	番号	遺跡名	所在地	遺跡面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	年度	種別	主な遺構・遺物の時代	調査期間	備考			
都農町	1	朝倉	都農町大字川北	20,500									
	2	尾立第2	〃	1,100									
	4	朝草原	〃	12,600									
	5	尾立第3	〃	3,000									
	6	尾立第4	〃	12,800									
	7	尾立第5	〃	2,700									
	8	立野第5	〃	13,500									
	9	立野第1	〃	5,200									
	10	立野第2	〃	400									
	11	立野第3	〃 字竜ヶ平	3,650	200	15	確認	—	15.11.17～12.9				
	12	立野第4	〃	3,150	80	15	確認	—	15.11.17～12.9				
	川南町	13	八幡第1	川南町大字川南字宮田上	2,750	220	15	確認		15.11.17～12.9			
14		八幡第2	〃 字八幡山	15,490	1,650	15	確認		15.11.13～16.2.20				
15		上ノ原・北分	〃	3,470					16.12.1～				
16		銀座第1	〃 字前田	38,600	788	14	確認	中世・近世	14.5.2～5.29	報告書刊行			
					856				14.10.21～11.6				
					2,012				14		本掘(一次)	14.7.8～10.31	
					2,140				14		本掘(二次)	14.11.1～15.3.31	
					4,044				14		本掘(三次)	15.4.3～5.29	
					800				14		本掘(三次)	14.12.10～15.3.5	
〃 字沓袋畑		800	15	確認	15.5.7～5.28								
		3,000	15	本掘(四次)	15.8.19～16.2.20								
〃		〃 字黒岩	7,500	441	14	確認	旧石器, 縄文[早], 近世	14.5.2～5.30					
				7,059				14		本掘	14.7.8～15.3.28		
18		銀座第3 A	〃 字明野	1,300	100	14	確認	旧石器, 縄文[早]	14.5.2～5.7	報告書刊行			
				300	14	本掘		14.6.17～7.31					
19		銀座第3 B	〃	300	10	14	確認	—	14.5.2～5.7				
20		登り口第1	〃	2,000									
21		登り口第2	〃	8,120									
22		山ノ口	〃	4,650									
23		谷ノ口	〃	200									
川南町		24	市納上第1	〃 字市納上	8,300	1,500	15	確認	旧石器, 縄文[早], 弥生, 中世	15.11.10～16.1.16			
						500				16		本掘	16.2.20～3.31
						5,200				16			16.4.1～10.12
	25	市納上第2	〃 字松尾谷	2,630	300	16	確認	—	16.5.24～7.14				
	26	市納上第3	〃	3,550	40	16	確認	—	16.5.24～7.14				
	27	市納上第4	〃 字幟立	4,230	200	16	確認	縄文[後]	16.5.24～7.14				
	28	市納上第5	〃	1,400	40	16	確認	—	16.5.24～7.14				
	29	虚空蔵免	〃 字鶴戸ノ本・赤坂・天神本	7,320	750	15	確認	旧石器, 縄文[早]	15.11.11～16.1.30				
	30	赤石・天神本	〃 字鶴戸ノ本・北原	41,000	6,630	15	確認・本掘	縄文[草創・早], 弥生	15.9.16～12.25				
	31	天神本第2	〃 字北原	1,360	220	15	確認	旧石器, 縄文[早], 弥生	16.1.26～2.20				
					660	16	本掘		16.7.12～9.17				
	32	大内原	〃 字北原	3,625	325	15	確認	弥生, 中世	15.11.10～16.1.22				
					3,300	16	本掘		16.11.8～				
	33	中ノ迫第1	〃 字中の迫	79,800	670	13	確認	旧石器, 縄文[早], 弥生	13.9.12～10.15				
2,680					15	確認	15.5.1～7.22						
2,280							15.7.2～9.29						
4,100							16		本掘		15.11.12～16.3.31		
2,600					15	確認	16.4.1～6.9						
6,000	16	本掘(二次)	16.2.2～3.30										
34	中ノ迫第2	〃 字中の迫	20,300	720	13	確認	旧石器, 弥生	16.5.10～					
35	中ノ迫第3	〃 字中の迫	10,200	480	16	確認	縄文[早]	13.10.15～11.30					
								本掘		16.5.24～7.7			
36	中ノ迫第4	〃 字中の迫	2,130	20	16	確認	—	16.11.26～					
				2,130	20	16	確認	16.5.24～7.7					

注* ゴシック文字の遺跡は、調査終了。

* 「遺跡面積」は当初の想定遺跡面積。「調査面積」は実掘の表面積。

* 数値等は、平成16年12月末時点でのもの。

表1 東九州自動車道（都農～西都間）関連遺跡一覧

市町	番号	遺跡名	所在地	遺跡面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	年度	種別	主な遺構・遺物の時代	調査期間	備考
川南町	37	前ノ田村上第1	川南町大字川南字須田久保	20,100	900	13	確認	弥生, 中世, 近世	13.9.11~11.15	
					5,200	14	本掘(一次)		13.12.13~14.3.29	
									14.4.4~10.11	
					500	14	確認		14.10.15~10.30	
					4,900		本掘(二次)		14.12.12~15.3.31	
				15.4.4~5.9						
				4,300	15	本掘(三次)	弥生, 中世, 近世	15.6.23~12.12		
	38	前ノ田村上第2	〃	10,900	2,154	13	確認	弥生, 中世, 近世	13.9.12~11.20	
	39	赤坂	〃 字山下道上・東国光	17,400	700	15	確認	弥生, 中世	16.2.2~3.30	
					16,700	16	本掘		16.6.1~	
	40	国光原	〃 字国光原	18,780	3,000	15	確認	縄文[早], 弥生	16.2.2~3.30	
					5,400	16	本掘		16.6.10~	
	川南町	41	湯牟田	〃 字湯牟田	21,750	1,350	13	確認	旧石器, 古代以降	13.10.2~11.29
2,350						14	本掘(一次)	13.12.10~14.3.29		
								14.4.3~7.31		
750						15	確認	15.5.1~7.4		
				9,600	16	本掘(二次)	縄文[早], 弥生, 中世	15.8.28~16.3.31		
								16.4.1~		
42		西ノ別府	〃 字尾花坂上	13,000	1,670	16	確認	縄文[早], 弥生	16.5.24~7.14	
				4,750		本掘		16.12.13~		
43	尾花A	〃 尾花西平	21,400	1,200	16	確認	縄文[早]・弥生・古墳	16.5.24~7.7		
				3,700	16	本掘		16.9.1~		
44	竹鳩	高鍋町大字上江字五郎丸	7,100	516	13	確認	—	13.10.2~10.5		
45	青木	〃 字崩戸	800	65	13	確認	縄文[草創・早・前], 中世	14.1.16~1.23	崩戸遺跡に名称変更	
				585	14	本掘		14.5.1~7.18		
高鍋町	46	野首第1	〃 字野首	10,600	39	12	確認	縄文[早~晩], 古墳, 中世, 近世	12.8.7~8.21	
					145	13	確認		13.12.17~12.27	
									14.1.15~3.29	
					10,116	14	本掘		14.4.8~15.3.31	
						15			15.4.1~16.3.29	
		300	16		16.6.1~8.6					
47	野首第2	〃 字青木	13,800	150	12	確認	旧石器, 縄文[早・後~晩], 古墳, 古代, 中世	12.6.19~6.28		
								12.8.7~8.22		
								12.9.28~10.13		
								13.3.12~3.16		
			2,450	13	本掘		13.5.7~14.3.29			
			14	14.4.3~15.3.31						
			6,500	15		15.4.1~16.3.31				
			16	16.4.1~						
48	南中原第1	〃 字北中原	14,700	200	13	確認	縄文[早]	14.2.26~3.18		
				120	15	確認		15.5.1~6.23		
				350		確認		16.5.24~6.30		
				4,400	16	本掘		17.1.5~		
49	南中原第2	〃 字北中原	3,500	180	15	確認	—	15.5.1~6.23		
50	老瀬坂上	〃 字北中原	6,600	110	13	確認	旧石器, 縄文[早], 古代	13.6.8~7.5	老瀬坂上第3遺跡に名称変更	
				6,490	14	本掘		13.9.3~14.3.29		
							14.4.3~12.9			
51	下耳切第3	〃 字下耳切	22,500	210	12	確認	古墳~古代	12.6.19~6.28		
								12.8.7~8.22		
				6,790		本掘(一次)		12.9.4~13.3.30		
				7,000	13	本掘(一次)		13.4.4~14.3.29		
			6,800	14	本掘(二次)	縄文[中・後], 古墳~古代	14.5.23~8.29			
52	北牛牧第5	〃 字牛牧	27,800	200	12	確認	旧石器, 中世	12.6.15~6.28		
								12.8.7~8.22		
								12.10.2~10.11		
								13.2.16~2.21		
				9,800		本掘(一次)		12.9.4~13.3.30		
			8,000	13	本掘(二次)	13.4.4~14.3.29				

注* ゴシック文字の遺跡は、調査終了。

* 「遺跡面積」は当初の想定遺跡面積。「調査面積」は実掘の表面積。

* 数値等は、平成16年12月末時点でのもの。

表1 東九州自動車道（都農～西都間）関連遺跡一覧

市町	番号	遺跡名	所在地	遺跡面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	年度	種別	主な遺構・遺物の時代	調査期間	備考
高鍋町	53	唐木戸第1	高鍋町大字上江字北唐木戸	17,600	300	13	確認	旧石器, 縄文[早]	14.3.6~3.8	報告書刊行
					2,000	14	本掘(一次)		14.5.7~8.29	
					700		確認		15.2.3~2.24	
					5,500	15	本掘(二次)		15.5.6~9.5	
	54	唐木戸第2	" 字北唐木戸	5,600	480	13	確認	縄文[早], 中世	14.3.11~3.22	
					4,200	14	本掘		14.9.2~15.3.7	
	55	唐木戸第3	" 字北唐木戸	2,900	25	12	確認	旧石器, 縄文[草創・早]	12.6.19~6.22	
						13	本掘		13.2.13~2.15	
					2,875	14			13.10.15~14.3.29	
	56	唐木戸第4	" 字北唐木戸	8,010	88	12	確認	旧石器, 縄文[草創・早]	12.6.19~6.27	
					7,812	13	本掘		12.8.7~8.10	
					110		確認		13.5.7~12.27	
	57	唐木戸第5	" 字北唐木戸	2,400	200	13	確認	-	14.2.4~14.2.22	
									14.2.25~3.6	
	58	小並第1	" 字西小並	7,700	650	13	確認	旧石器, 縄文[草創・早]	13.5.13~6.8	
7,050					14	本掘	13.9.3~14.3.29			
59	小並第2	" 字黒土田	2,700	50	13	確認	-	14.4.3~12.25		
				220		確認		13.5.13~6.8		
60	牧内第1	" 字牧内	14,400	296	12	確認	旧石器, 縄文[草創]	12.8.7~8.11		
				2,104		本掘(一次)		12.10.2~10.16		
				3,400	13	本掘(二次)		12.11.6~13.3.30		
				3,700	14	本掘(三次)		13.4.3~14.3.29		
						旧石器		14.1.10~14.3.29		
61	牧内第2	" 字牧内	8,000	4,430	14		旧石器, 縄文[草創]	14.4.3~11.29		
				4,900	15	本掘(四次)		14.9.17~15.3.31		
								15.4.1~6.23		
62	音明寺第1	新富町大字新田字音明寺	8,500	56	12	確認	旧石器, 縄文[早]	12.8.7~8.11	報告書刊行	
				529	13	確認		13.2.5~2.14		
				4,715		本掘		13.6.4~6.27		
63	音明寺第2	" 字音明寺	16,800	150	12	確認	旧石器, 縄文[早], 中世以降	12.4.13~4.18	報告書刊行	
				5,350	13	本掘		12.6.5~6.14		
						本掘		12.9.4~13.3.30		
						本掘		13.4.3~7.31		
新富町	東畦原第1	" 字下迫口	14,800	200	12	確認	旧石器, 縄文[早], 中世以降	12.6.5~6.14	報告書刊行	
				2,100		本掘(一次)		12.7.24~8.1		
				500	13	確認		12.9.4~13.2.21		
				5,700	14	本掘(二次)		14.1.30~2.20		
				712	13	確認		14.5.16~12.26		
				5,088	14	本掘(一次)		13.8.6~8.31		
				588	13	確認		13.11.1~14.3.29		
				2,200	14	本掘(二次)		14.4.1~9.30		
64	東畦原第2	" 字中原	7,200	3,800	15	本掘(三次)	旧石器, 縄文[早]	14.1.30~2.20		
				3,000	16	本掘(四次)		14.5.20~12.26		
								14.11.11~15.3.31		
65	東畦原第3	" 字大中原	9,000	3,000	15	本掘(四次)	旧石器	15.4.1~6.6	報告書刊行	
				518	13	確認		15.8.1~16.3.31		
				3,482	14	本掘(一次)		16.4.1~7.15		
66	東畦原第3	" 字大中原	9,000	518	13	確認	旧石器, 縄文[早]	13.8.6~8.31		
				3,100	14	本掘(二次)		13.11.1~14.3.29		
								14.4.3~8.9		
66	東畦原第3	" 字大中原	9,000	200	12	確認	旧石器	14.9.24~15.2.14		
				5,200	13	本掘(一次)		12.7.24~8.4		
				1,800	13	本掘(二次)		12.9.9~9.29		
								12.11.6~13.3.30		
								13.4.3~9.28		

注* ゴシック文字の遺跡は、調査終了。

* 「遺跡面積」は当初の想定遺跡面積。「調査面積」は実掘の表面積。

* 数値等は、平成16年12月末時点でのもの。

表1 東九州自動車道（都農～西都間）関連遺跡一覧

市町	番号	遺跡名	所在地	遺跡面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	年度	種別	主な遺構・遺物の時代	調査期間	備考
新富町	67	西畦原第1	新富町大字新田字吐合	26,350	250	12	確認	旧石器, 縄文 [早], 弥生, 古代以降	12.6.5~6.13	報告書刊行
					2,950	12	本掘(一次)		12.7.24~8.3	
					2,700	13			12.9.9~9.29	
					7,550	14	本掘(二次)		12.9.4~13.3.30	
	68	西畦原第2	" 字前原	18,300	400	12	確認	旧石器, 縄文 [早]	12.6.5~6.8	
					7,980	13	本掘(一次)		12.9.20~10.5	
					360	13	確認		13.5.7~14.3.29	
					760	14	本掘(二次)		14.2.12~3.12	
					3,700	15	本掘(三次)		14.9.24~12.26	
	69	上新開	" 字上新開	19,900	490	14	確認	旧石器, 縄文 [早]	14.8.26~9.13	
					3,710	15	本掘		14.11.9~15.3.31	
	70	一丁田	" 字壹丁田	14,900	44	12	確認	-	14.11.9~15.3.31	
					104	13	確認		15.4.1~10.1	
					166	14	確認		12.7.24~8.3	
	71	勘大寺	" 字駒取場	16,900	370	12	確認	旧石器, 縄文 [早]	12.7.24~8.3	
					2,500	14	本掘(一次)		13.8.6~8.31	
						16	本掘(二次)		14.9.3~9.25	
						16	本掘(二次)		12.4.13~4.18	
	72	永牟田第1	" 字永牟田	5,100	90	12	確認	旧石器, 弥生	12.7.19~7.28	
					300	15	本掘		14.9.9~15.2.28	
1,800					15	本掘	16.9.1~			
73	永牟田第2	" 字永牟田	24,600	550	12	確認	縄文 [早]	12.9.30~10.6		
				60	14	確認		15.5.1~6.6		
					16	本掘		15.9.11~12.25		
					16	本掘		12.6.5~6.12		
74	尾小原	" 字尾小原	25,600	928	12	確認	旧石器, 縄文 [草創・早]	12.8.1~8.4		
					13	確認		12.9.20~10.2		
				4,572	14	本掘(一次)		14.12.3~12.13		
				350	15	確認		16.12.6~		
				5,000	15	本掘(二次)		12.3.23~3.29		
				400	16	確認		13.5.14~6.1		
				2,000	16	本掘(三次)		13.11.1~14.3.29		
75	向原第1	" 字綿内	15,300	800	11	確認	旧石器, 縄文 [早], 弥生, 古墳 [前]	14.4.1~8.30		
				500	12	確認		15.5.1~7.14		
				385	13	確認		15.9.4~16.1.29		
				2,315	14	本掘		16.9.8~10.15		
76	向原第2	" 字綿内	7,000	800	11	確認	縄文 [早], 弥生	16.12.1~		
				410	15	確認		12.3.21~3.28		
77	藤山第1	" 字綿内	4,600	500	14	本掘(一次)	-	12.9.14~9.29		
				1,800	16	本掘(二次)		13.11.2~11.28		
					16	本掘(二次)		14.3.11~3.29		
78	藤山第2	" 字藤山	2,200	60	12	確認	縄文 [早]	14.4.3~8.10	報告書刊行	
				940	12	本掘		14.12.13~12.25		
西都市	宮ノ東	西都市大字岡富字宮ノ東	21,900	800	11	確認	旧石器, 縄文, 弥生, 古墳, 古代, 中世, 近世	13.11.1~11.20		
				410	15	確認		14.6.3~7.15		
				8,100	16	本掘		16.7.13~9.24		
80	宮ノ前	" 字宮ノ前	200	12	12	確認	12.7.24~8.4	報告書刊行		

注* ゴシック文字の遺跡は、調査終了。
 * 「遺跡面積」は当初の想定遺跡面積。「調査面積」は実掘の表面積。
 * 数値等は、平成16年12月末時点でのもの。

第3節 基本層序

現在、宮崎県埋蔵文化財センターでは東九州自動車道関連の遺跡調査に際して、新富・高鍋町域の発掘成果をもとに基本層序を作成し、遺跡間の共通理解を図っている。しかし、発掘調査の対象となる地域が次第に北へと移り、川南町における発掘調査では既存の基本層序が対応しない場合も少なくない。そこで、本年度新たに川南町域での調査成果をもとに作成した基本層序が表2である。基本層序においては、火山灰層は略号、火山灰降下後に発達するローム層はML、さらにローム層が土壌化した黒色土帯はMBの記号を用いて表している。

新富・高鍋町域で確認されていた数種の火山灰層のうち、川南町域でも肉眼で明瞭に確認できるものはK-AhとATである。この他に、Kr-KbはML1下位のローム層中に僅かに含まれる状態で確認できる場合があり、中ノ迫第1遺跡や市納上第1遺跡はその例である。Kr-Iwも局所的に堆積していることがあり、西ノ別府遺跡や湯牟田遺跡など

で確認された。Sz-Sは湯牟田遺跡の窪地のみでの確認である。

なお、現状では川南町のAT下位、特にKr-Iw下位については調査事例が少なく、谷部や扇状地では大小規模の土石流が堆積している場合もあるため、より古期の層序については不明な部分が多い。そのような中、中ノ迫第1遺跡で最下層に見られる黄褐色～赤褐色のローム層からはA-Iw由来と思われる石英が検出されている。ただし他の火山灰に由来する軽石粒やその他の鉱物と混在しており、さらに拳大の礫も含まれていることから、堆積時に流水や土石流の影響を受けた可能性が高い。また銀座第1遺跡ではAso-4の堆積が確認されており、湯牟田遺跡では肉眼による識別は困難であるが、テフラ分析によってAso-4テフラが検出されている。以上のことから、川南町でも条件の良い所ではA-Iw・Aso-4の堆積が確認できると考えられ、今後の調査を行う中で川南町域全体における基本的堆積状況が明らかになるであろう。

(文責 福田 聡)

表2 東九州自動車道川南町域基本層序（新富・高鍋町域との対比関係）

川南町域基本層序			新富・高鍋町域基本層序		
No.	略称	層名	略称	層名	年代
1		表土		表土	
2	クロボク	黒色土	Kr-Th	高原スコリア	A D 1235
3	K-Ah	鬼界アカホヤ	K-Ah	鬼界アカホヤ	6.5ka
4	MB0	黒褐色ローム	MB0	黒褐色ローム	
5	ML1	暗褐色ローム	ML1	暗褐色ローム	
6	Sz-S	桜島薩摩	Sz-S	桜島薩摩	11ka
7	ML1	褐色ローム	ML1	褐色ローム	
8	Kr-Kb	小林軽石を含む層	Kr-Kb	小林軽石を含む層	15ka
9	MB1	暗褐色ローム	MB1	暗褐色ローム	
10	ML2	褐色ローム	ML2	褐色ローム	
11	AT	始良Tn	AT	始良Tn	24.5ka
12	MB2	暗褐色ローム	MB2	暗褐色ローム	
13	MB3	暗褐色ローム	A-Fm	始良深港	26.5ka
			A-Ot	始良大塚	30ka
14	ML3	褐色ローム	MB3	暗褐色ローム	
			ML3	褐色ローム	
15	ML4	明褐色ローム	Kr-Aw	アワオコシ	41ka
16	Kr-Iw	イワオコシ	ML4	明褐色ローム	
			Kr-Iw	イワオコシ	50ka
17		明黄褐色ローム		明黄褐色ローム	
18		キンキラローム		キンキラローム	
19	A-Iw	始良岩戸	A-Iw	始良岩戸	60ka
20	Aso-4	阿蘇4	Aso-4	阿蘇4	86~90ka

※年代は奥野充・福島大輔・小林哲夫「南九州のテフロクロノロジー」(『人類史研究』12 2000)による。未較正。

第4節 遺跡の立地と環境

東九州自動車道（西都～都農間）の発掘調査は、新富町、高鍋町内の遺跡では終盤を迎え、主体は川南町・都農町に移行しつつある。新富町、高鍋町は新田原・三財原・茶臼原という大きく3つの段丘面からなる。一方、川南町では、丘陵、複数の段丘面、扇状地が入り組む複雑な地形を呈し、新富、高鍋町内とは、異なる立地と環境が見られる。

そこで今回は、川南町を中心とする地勢を概観し、地形と、その名称について整理することで、今後遺跡の立地や展開を考察するにあたっての、基礎的作業を行うものとする。

【川南町の地勢概観】

川南町は宮崎平野北端に位置し、東は黒潮が北流する日向灘を臨み、南は小丸川の北岸で高鍋町と、北は名貫川南岸で都農町と接する。

町の北西部に位置する上面木山（標高1,040m）からは丘陵が派生し、その東麓から海岸にかけて広がる段丘面が、町域の大半を占めている。一方、沖積地は町の中心部を流れる平田川河口部付近において、僅かに見られるのみである。

【段丘面】

川南町の段丘面は、南から高城・川南・国光原、唐瀬原（註1）と、大きく4つに分かれる。高城段丘面は、小丸川北岸の下流域に、東西方向に細長く延び、川南段丘面は、高城段丘面と海岸線に挟まれた三角地帯に広がる。さらに町内北西側の丘陵部には、唐瀬原段丘面が展開する。そして、国光原段丘面がこれら3つの段丘面に囲まれるように位置する。では、以下、各段丘面の諸特徴について概観を示すこととする。

高城段丘面は標高約50m～95mに位置し、小丸川支流の切原川に沿い、海岸方向へ傾斜する。縁辺部は急崖となっており、隣接する沖積地とは比高差約45mを測る。

川南段丘面は、標高約50m～65mに位置し、平坦面が海岸付近まで広がり、海岸線沿いは海食崖が発達している。また、高城段丘面と接する字俵橋以西では、比高差を持たず連続するが、南側で

は開析谷により、川南段丘面と隔てられている。さらに川南段丘面は平田川を挟み北側にも分布しており、その間には、一段標高の低い段丘面が複雑に形成されている。

国光原段丘面は標高約60m～80mに位置し、段丘面中央部分では、平坦面が広がりを見せるが、隣接する高城段丘面・川南段丘面より一段高く、それぞれの境界付近は、10m程の緩斜面をなす。

唐瀬原段丘面は、川南段丘面の西側に隣接して広がり、標高約80～150mに位置する。丘陵から東に向かい傾斜し、段丘面端部においては開析谷が発達し、八つ手状に広がる。

また、北を唐瀬原段丘面、南を国光原段丘面、西を高城段丘面に囲まれて、十文字扇状地が広がる。標高約63mを測り、隣接する国光原段丘面とは約20mの比高差をもつ。

【まとめ】

このように川南町の地形は、小丸川北岸の高城段丘面、上面木山山麓を中心に展開する唐瀬原段丘面、町域の東部、日向灘に面する川南段丘面、これら3つの段丘面に、三方を挟まれる形で位置する国光原段丘面、そして段丘面間で発達する扇状地、小規模な沖積地とまとめられる。

以上のように複数の段丘面や扇状地を通る東九州自動車道に係る調査においては、段丘面単位という視点から、同一段丘面上、また段丘面相互の遺跡展開等を、比較・検討していく上で良好な条件を満たしている。よって、今後、各遺跡の調査結果を総合的にふまえて、考察してゆくことが望まれる。

（文責 嶋田史子）

註1）川南町の段丘面は、分布高度や堆積物の差異により14面に区分されている。段丘面の名称は、研究者により異なり、今回は、長岡（1983）の名称を用いる。

【参考文献】

早田 勉 1997「三 宮崎平野の地形発達史」

『宮崎県史』

川南町 1983「第二節 地勢」『川南町史』

長岡信治 1983「1.川南町の地質と地形の概括」

『川南町の埋蔵文化財』遺跡詳細分布調査報告書
川南町教育委員会



第2図 段丘面別遺跡分布図 (S=1:50,000)

第5節 整理作業

今年度、埋蔵文化財センターでは29遺跡の整理作業を実施し、13遺跡の報告書を刊行した。本館においては、水洗、注記、土器・石器の接合、実測、土器の拓本などのほか、発掘調査報告書作成としての製図、レイアウト作業、写真撮影や収蔵遺物整理、及びフローテーション作業などを行った。フローテーション作業の結果、住居跡などからサンプリングした土から炭化米やアワ、コムギなど様々な種子が確認されており、当時の植生や

食文化について分析がなされつつある。

さらに東畦原整理作業棟においては、9遺跡で出土した旧石器時代や縄文時代早期の礫の水洗、注記、接合、計測、接合データの整理等を行った。また遺物出土量の多い3遺跡（野首第1遺跡・野首第2遺跡・宮ノ東遺跡）の土器・陶磁器・石器等の遺物の水洗、注記の作業を行った。

他に、4遺跡で発掘作業と並行しながら、現場で出土遺物の水洗、注記の作業を実施し、整理の進捗を図った。

(文責 大村公美恵)

表3 整理作業を実施した遺跡

[本館]		[東畦原整理作業棟]	
遺跡名	遺物量(礫を除く)	遺跡名	遺物量
前ノ田村上第1遺跡(二・三次)	土器1箱、陶磁器19箱、石器1箱	銀座第2遺跡	礫30箱
銀座第1遺跡(一・二・四次)	土器・陶磁器16箱	中ノ迫第1遺跡	礫41箱
銀座第1遺跡(三次)	土器・陶磁器3箱、石器1箱	野首第1遺跡	土器・陶磁器・石器13箱
銀座第2遺跡	土器11箱、陶磁器2箱、石器1箱	野首第2遺跡	土器50箱、石器80箱
赤石・天神本遺跡	土器7箱、石器26箱	老瀬坂上遺跡	礫350箱
虚空蔵免遺跡	土器1箱	西畦原第2遺跡(二・三次)	礫53箱
中ノ迫第1遺跡	土器11箱、石器6箱	東畦原第1遺跡(三・四次)	礫80箱
市納上第1遺跡	土器10箱	尾小原遺跡(二次)	礫6箱
国光原遺跡	土器19箱、石器1箱	永牟田第1遺跡	礫22箱
天神本第2遺跡	土器1箱、石器2箱	上新開遺跡	礫30箱
牧内第1遺跡(一・二・三次)	土器1箱、石器40箱	藤山第1遺跡(二次)	礫194箱
牧内第1遺跡(四次)	土器1箱、石器13箱	宮ノ東遺跡	土器・陶磁器・石器132箱
唐木戸第2遺跡	土器3箱、石器1箱		
唐木戸第3遺跡	土器2箱、石器24箱	[現場整理作業棟]	
老瀬坂上遺跡	土器32箱、石器65箱		遺跡名
崩戸遺跡	土器4箱、石器1箱	中ノ迫第1遺跡(二次)	
下耳切第3遺跡	土器150箱、石器145箱	湯牟田遺跡(二次)	
野首第1遺跡	土器102箱、陶磁器41箱、石器20箱	尾花A遺跡	
向原第1遺跡	土器22箱、石器4箱	野首第2遺跡	
尾小原遺跡(二次)	土器1箱、石器3箱		
勘大寺遺跡	土器1箱、石器10箱	【報告書刊行遺跡】	
西畦原第2遺跡(二・三次)	土器1箱、石器3箱	・湯牟田遺跡	・音明寺第1遺跡
東畦原第1遺跡(三・四次)	土器2箱、石器29箱	・唐木戸第1遺跡	・音明寺第2遺跡(二次)
永牟田第1遺跡	土器5箱、石器9箱	・唐木戸第2遺跡	・東畦原第2遺跡
上新開遺跡	石器50箱	・唐木戸第3遺跡	・西畦原第2遺跡
藤山第1遺跡(二次)	土器4箱、石器21箱	・崩戸遺跡	・勘大寺遺跡
		・牧内第1遺跡(四次)	・藤山第2遺跡
		・牧内第2遺跡	

第6節 現地説明会等

埋蔵文化財センターでは、東九州自動車道に伴う発掘調査の成果を一般の方々に広く公開するための活動を行っている。一般的には、発掘調査を実施している現地で、速報的に調査成果を伝えるため検出された遺構や遺物について解説を行う現地説明会や公民館や現場事務所等において遺構や遺物の内容、そして遺跡の性格、特徴などの概要説明や調査状況の写真、遺物等を展示する調査報

告会を開催している。また、教職員の研修や小・中学校等からの要請による児童・生徒の体験発掘の受入れのほか、埋蔵文化財センター神宮分館での展示、埋蔵文化財講座での遺跡概要報告など様々な形で普及活動を実施している。

(文責 谷口武範)



写真4 勘大寺遺跡体験発掘風景



写真5 赤坂遺跡現地説明会

実施日	遺跡名	実施時間	参加者
4月21日(水)	湯牟田遺跡(二次調査)	13:00~16:00	46名
7月21日(水) ~ 22日(木)	野首第2遺跡発掘体験 * 教職経験10年経過研修 * 21午後・22日発掘調査体験実施	21日; 13:40~17:00 22日; 8:30~17:00	27名
10月28日(木)	野首第2遺跡地層見学 * 高鍋西小学校 児童30名 引率教諭2名	9:00~11:30	32名
11月1日(月)	野首第2遺跡地層見学 * 高鍋西小学校 児童30名 引率教諭2名	9:00~11:30	32名
11月5日(金)	野首第2遺跡地層見学 * 高鍋西小学校 児童30名 引率教諭2名	9:00~11:30	32名
11月23日(火)	勘大寺遺跡発掘体験 * 富田小学校文化財愛護少年団11名 * 校長・教諭3名、町職員1名	10:30~12:00	16名
12月12日(日)	湯牟田遺跡(二次)	13:00~16:00	84名
1月23日(日)	赤坂遺跡	13:00~15:00	105名
3月5日(土)	天神本遺跡・中ノ迫第1遺跡・大内原遺跡	13:00~16:00	65名

表4 現地説明会実施状況

第Ⅱ章 確認調査の結果

26・27・28

いちなわかみ

市納上第3・4・5遺跡

(1) 遺跡の立地

これらの遺跡は川南町北西部、名貫川右岸に広がる唐瀬原段丘上の中央部に位置し、標高90m～120mを測る。市納上第3遺跡は市納上第2遺跡と第4遺跡の間の谷部、市納上第4遺跡は小尾根に挟まれた谷部、そして市納上第5遺跡は市納上第4遺跡の南側の小尾根部分に位置する。これらの遺跡は東から西へ傾斜する尾根の斜面に立地しており、地形的脈絡からすると一連の遺跡と考えられるので、これらの確認調査の結果をまとめて報告する。

(2) 調査の概要

①市納上第3遺跡

1トレンチは表土（Ⅰ層）、KAh二次堆積層（Ⅱ層）、褐色ローム（Ⅲ層）、小礫混明褐色ローム（Ⅳ層）、岩盤（Ⅴ層）であり、その他のトレンチは表土直下が岩盤であった。遺構は検出されず、

遺物に関しても1TのⅣ層からスクレイパー（第4図）が1点出土したのみであった。出土位置は急斜面であり、またこの層には小礫が混じっていることから原位置を保っていない可能性が高い。このスクレイパーは背面の一部に礫面を残し、下端部に背面側からの剥離により刃部を形成している。計測値は長さ5.0cm、幅4.5cm、厚さ1.5cm、重量32.3gであり、左端部に使用痕と思われる微細な剥離がみられる。石材は頁岩と思われる。

（文責 立神勇志）

②市納上第4遺跡

基本層序は表5に示した。

調査時は、石器を含む多量の石が積まれた箇所が随所に確認され、土器も多く表面採集された。

全トレンチにおいて遺構は検出されず、一方、遺物は多く出土した。各トレンチにおける層の堆積状況は異なるが、遺物を含むのはⅠa～Ⅲa層である。Ⅰa層は表土、Ⅰb層は造成土、Ⅱ層は造成による黒色土、そしてⅢa層はⅢb層（地山）が攪乱を受けた層である。従って、いずれの層も良好な包含層を成しておらず、時期の異なる遺物が各層で混在している在り方を示していた。

遺物は縄文土器（早水台式、阿高式、磨消縄文系）と弥生土器で、大部分を縄文時代後期に属する土器が占める。一方、石器類は石錘、磨石、敲

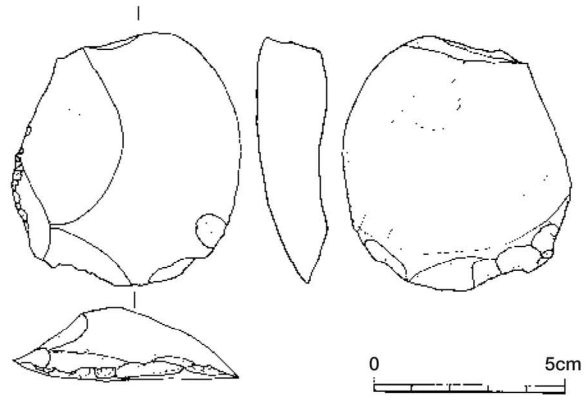


第3図 周辺地形とトレンチ配置図 (1/4000)

石、石皿、石斧があり、特に尾鈴山酸性岩類製の剥片が多量に出土した。

③市納上第5遺跡

基本層序は市納上第4遺跡と同じである。現況は、調査区南側を中心とする大部分は削平されており、岩盤が露出している部分もあった。従って、北側部分のみトレンチを設定したが、いずれのトレンチにおいても遺構は検出されなかった。遺物は土器と石器が少量出土にとどまるが、出土状況や種類は市納上第4遺跡と同様であった。



第4図 市納上第3遺跡出土遺物 (S=2/3)

(3) 小結

市納上第3遺跡における確認調査の結果、遺構は確認されず出土遺物もわずかであったことや層の堆積状況も合わせて、遺構や遺物包含層の存在する可能性は低い。

また、市納上第4・5遺跡では遺構は確認されなかったが、縄文時代後期を中心とする多量の土器と石器が出土した。

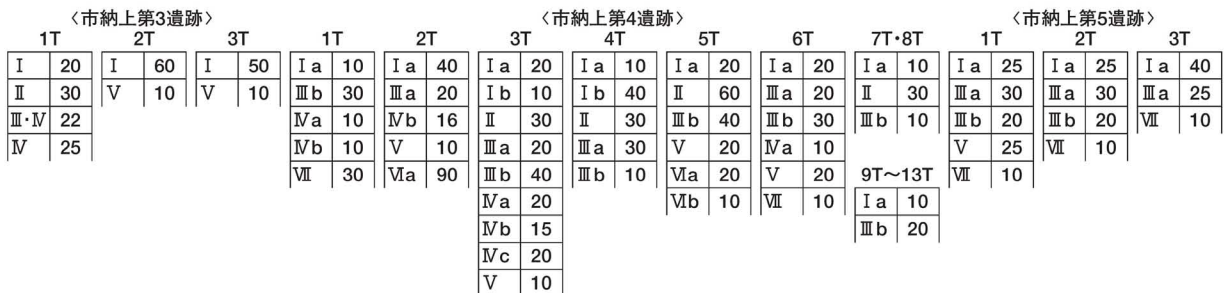
遺物の出土状況や層の堆積状況と土地利用状況の聞き取り調査から、戦後に大規模な開墾・造成が行われ、既に遺構及び遺物包含層は失われたと考えられる。

従って、市納上第3～5遺跡では本調査の必要はないと考えられる。

(文責 岡田 諭)

表5 市納上第4・5遺跡基本層序

層番号	層名	土色	土質	遺物	注記
I a	暗褐色粘質土	10YR3/4	粘性中しまり中	縄文時代後期～現代	表土
I b	暗褐色粘質土	7.5YR3/4	粘性中しまり中	縄文時代後期～現代	造成土
II	黒褐色粘質土	10YR2/2	粘性中しまり強	縄文時代早期～弥生時代	硬質の黒色土をブロック状に含む
III a	暗褐色粘質土	10YR3/4	粘性中しまり中	縄文時代早期～弥生時代	褐色粘質土を斑に含む 竹根等植物による攪乱激しい
III b	褐色粘質土	10YR3/4	粘性中しまり強	無遺物層	色質ともに安定 地山
IV a	黄褐色砂質土	10YR5/8	粘性弱しまり強	無遺物層	砂質土に硬質の黒褐色土をブロック状に含む
IV b	黒褐色粘質土	7.5YR3/2	粘性強しまり強	無遺物層	褐色粘質土に硬質の黒褐色土をブロック状に含む
IV c	暗赤褐色粘質土	5YR3/2	粘性中しまり強	無遺物層	暗褐色粘質土に若干の小礫と硬質の黒色土をブロック状に含む
V	暗褐色粘質土	7.5YR3/4	粘性弱しまり強	無遺物層	小礫を多く含む
VI a	明褐色粘土	2.5YR5/8	粘性強しまり強	無遺物層	2 cm以下の赤褐色礫を疎に含む
VI b	橙色粘土	7.5YR6/8	粘性強しまり強	無遺物層	VI a層と同質で色が異なる
VII	岩盤			無遺物層	



第5図 市納上第4・5遺跡土層柱状図 (数値は平均厚、単位はcm)

36 なかのさこ 中ノ迫第4遺跡

(1) 遺跡の立地

本遺跡は、川南町北西部にある尾鈴山系東麓より派生する唐瀬原台地の南側、丘陵斜面（標高約80m）に位置し、唐瀬原・国光原台地間に広がる平地に面している。現況は、南東部が急な崖となり、北西部においては宅地造成のためか、大きく地形が改変されている。

(2) 調査の概要

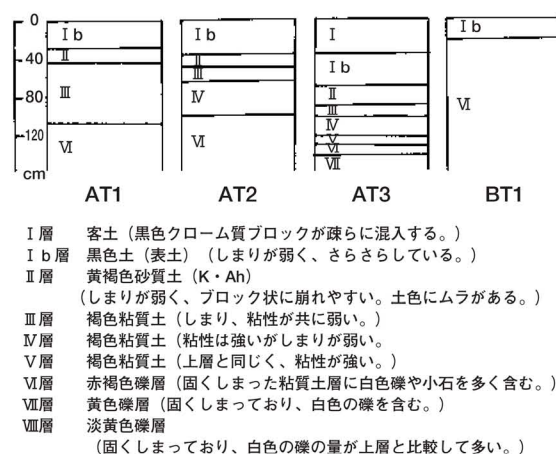
調査対象地を便宜上、南北に走る町道より西側をA区、東側をB区とし、A区に3箇所、B区に1箇所のトレンチを設定し、遺構・遺物の確認に努めた。

A区は、各トレンチにおいてK-Ah（第Ⅱ層）を検出したが、上面での遺構・遺物はいずれも認められなかった。第Ⅲ層～第Ⅵ層は、隣接する中ノ迫第3遺跡で後期旧石器時代文化層と考えられる第Ⅵ層・第Ⅶ層と類似しており、当該期の遺物包含層の存在が想定されたが、各トレンチとも遺構・遺物は認められなかった。なお、第Ⅶ層以下は礫層である。

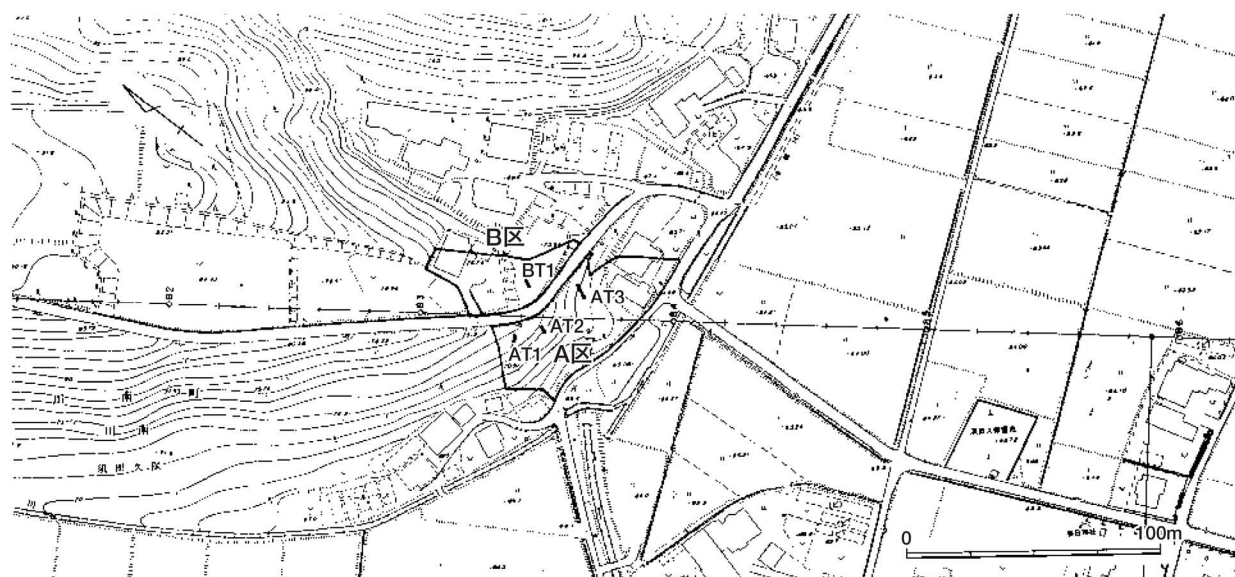
B区は、表土直下に中ノ迫第3遺跡で確認した第Ⅺ層を検出した。また、B区全体は宅地造成による著しい地形の改変が認められるため、遺物包含層が既に失われていると判断された。

(3) 小結

A区においてはK-Ahが残存することが確認できたが、遺構・遺物の存在は認められなかった。さらに、第Ⅱ層以下から第Ⅵ層に至るまでの、遺構・遺物は認められなかった。一方、B区については表土下に礫層を確認し、A区で見られた第Ⅱ層から第Ⅶ層といった層の堆積は既に失われていると判断された。従って、A区・B区とも本調査の必要性はないと考えられる。（文責 渡辺美幸）



第6図 基本土層



第7図 周辺地形とトレンチ配置図 (S=1/3000)

第Ⅲ章 本調査の成果

24 いちなわかみ 市納上第1遺跡

(1) 遺跡の立地

尾鈴山系に属する上面木山(1,040m)の東麓に広がる丘陵と唐瀬原台地との境目付近、平田川北側の標高約110mの丘陵端部斜面上に位置する。

(2) 遺跡の概要

KAh上の黒褐色土(Ⅱ層)は調査区の1/3にあたる南西部分のみ弥生時代の遺物を包含していた。KAh(Ⅲ層)上面で遺構検出を行い、KAh(Ⅲ層)下について、5m×5mのトレンチを設定し、遺構・遺物の有無を確認した。

①後期旧石器～縄文時代早期

調査区の南西隅で明褐色ローム(Ⅵ層)下部から、ナイフ形石器、二次加工のある剥片、石核が出土した。また、調査区の北東隅では、MB0(Ⅳ層)中で縄文土器、黒曜石碎片、ML1(Ⅴ層)からは石鏃、石匙が出土した。

②弥生時代後期後葉～終末期

調査区の南西部分で竪穴住居1軒と周溝状遺構1基が検出された。

SA1は、2.3m×1.4mの規模で、長方形に近い形状であった。遺構が斜面にあることから、本来は正方形に近い形状であったと考えられる。埋

土から、弥生土器の甕(第11図の1)、壺、高杯が出土している。

SL1は、攪乱や下方の消失で、その全容はわからないが、平面形態は隅丸方形で、4m以上はあったと考えられる。遺物は、南西の角部分に若干の偏りがみられる。主に弥生土器の甕(第11図の2～5)が出土し、他に壺・高杯がある。

SA1・SL1から出土した弥生土器は、弥生時代後期後葉～終末期の時期に入ると考えられる。

②中世

調査区東端でKAh上面において、SE1が検出された。等高線に平行するかたちで、南北方向にのびる。埋土中からヘラ切りの土師器の杯・青磁の碗が出土し、14～15世紀のものである。

(3) 小結

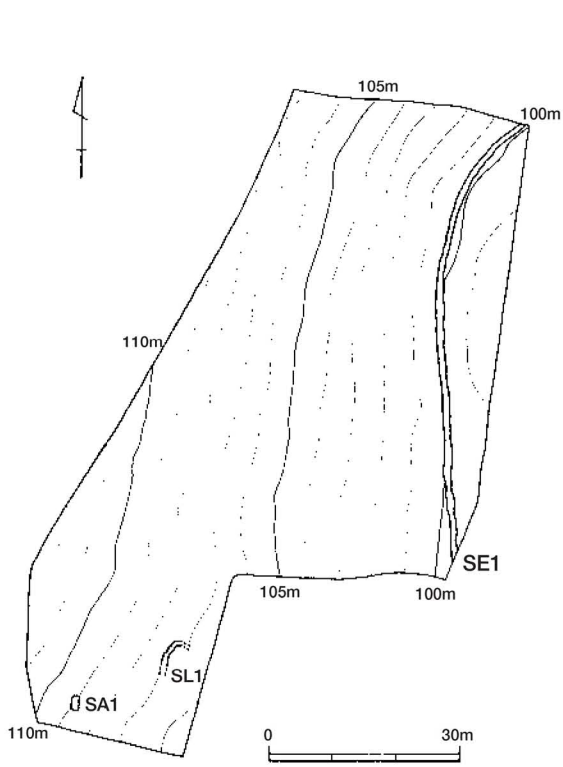
弥生時代に関して、今回検出した遺構の北側においては、遺構・遺物はみられなかった。しかし、本遺跡南側の確認調査においては、弥生土器が確認されており、集落は南側に広がるものと考えられる。

市納上第1遺跡は、丘陵と台地との境目付近の斜面上に立地しており、川南町で確認されている他の弥生時代の遺跡とは様相が異なる。今後、遺物の整理や遺構の検討によって、本遺跡の性格などが明らかになっていくものとみられる。

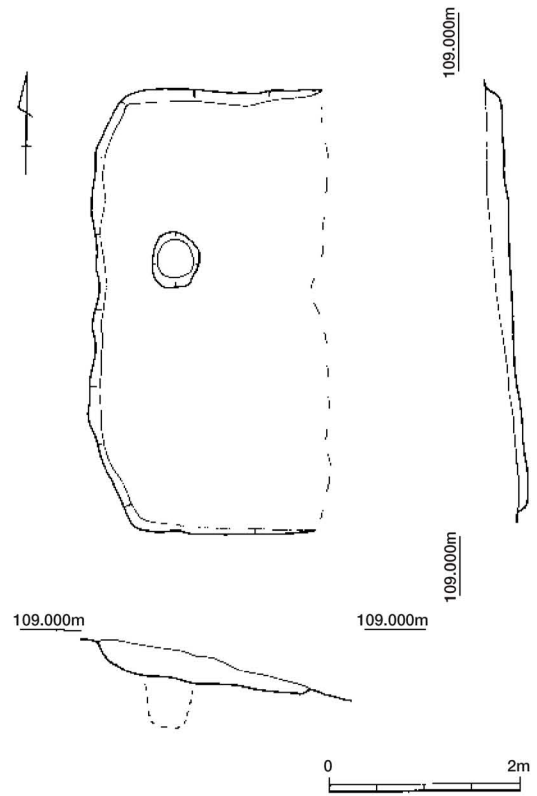
(文責 森本証明)



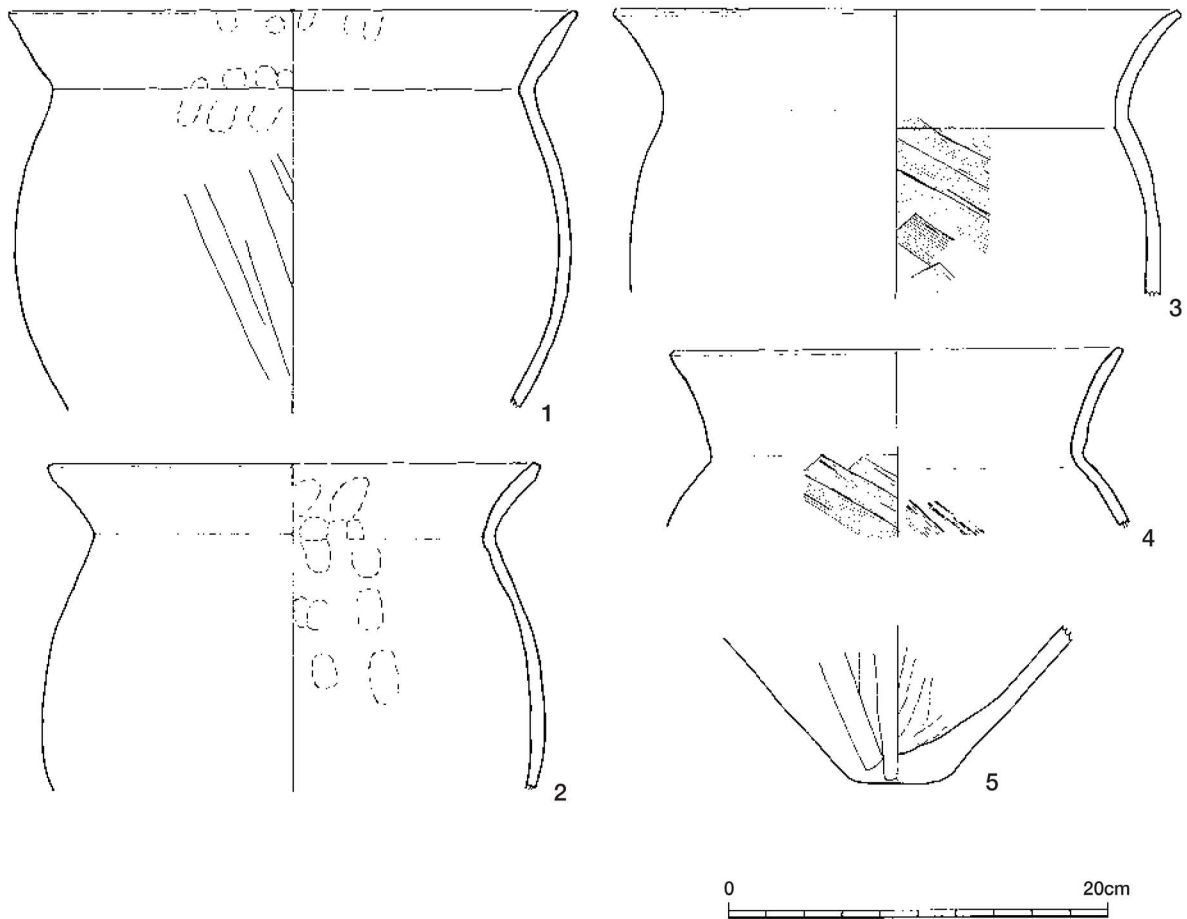
第8図 調査区と周辺地形 (S=1/4000)



第9図 k-Ah上面検出遺構分布図 (S=1/1200)



第10図 SA1実測図 (S=1/40)



第11図 SA1・SL1出土遺物実測図 (S=1/4)

31 ^{てんじんもと}天神本第2遺跡

(1) 遺跡の位置

天神本第2遺跡は、尾鈴山系の上面木山の南東に広がる緩斜面上にあり、小河川（篠原川）に接する。遺跡地の標高は約110mを測る。

(2) 調査の概要

平成15年度に実施された確認調査の結果、K-Ah上面で溝状遺構3条、道路状遺構が1条検出され、MB0（IV層）より縄文時代早期の集石遺構や剥片等が確認されている。そのため、K-Ah下位層を対象に、7月より本調査が実施されることとなった。

①後期旧石器時代

IV層下部より細石刃核1点、細石刃2点が出土している。該期の遺物包含層は明確でないが、おそらく本来はV層（褐色土・ML1該当か）に属するものと推定される。

②縄文時代早期

調査区南東端部を中心に、IV層下部からV層上部の層準より多量の遺物が出土し、集石遺構が2基検出された。遺物の分布を概観すると、大きくは3箇所の遺物集中箇所が確認できる（第13図網掛け部）。大多数は1cm以下の碎片であり、石鏃やその未製品が6点含まれる。そのような状況から、当地は縄文時代早期の石器製作跡であったと推定される。伴出した土器より、押型文系土器期の所産と考えられる。石材はチャートが多い。一方、遺物集中箇所以外の場所では、遺物の出土量が極端に少なくなる。

集石遺構は2基確認された。うち1基（SI1）は上記の遺物集中箇所から離れた位置にある。いずれも下部に土坑を有するもので、SI2の底面近くには比較的大きな礫を配している。また両者とも、礫間に炭化物が認められた。

③弥生時代中期～後期

II層（黒褐色土）中より土器片が出土している。多くは中期から後期に属するものである。須玖式系土器の口縁部片が1点出土している。



第12図 調査区と周辺地形 (S=1/2000)

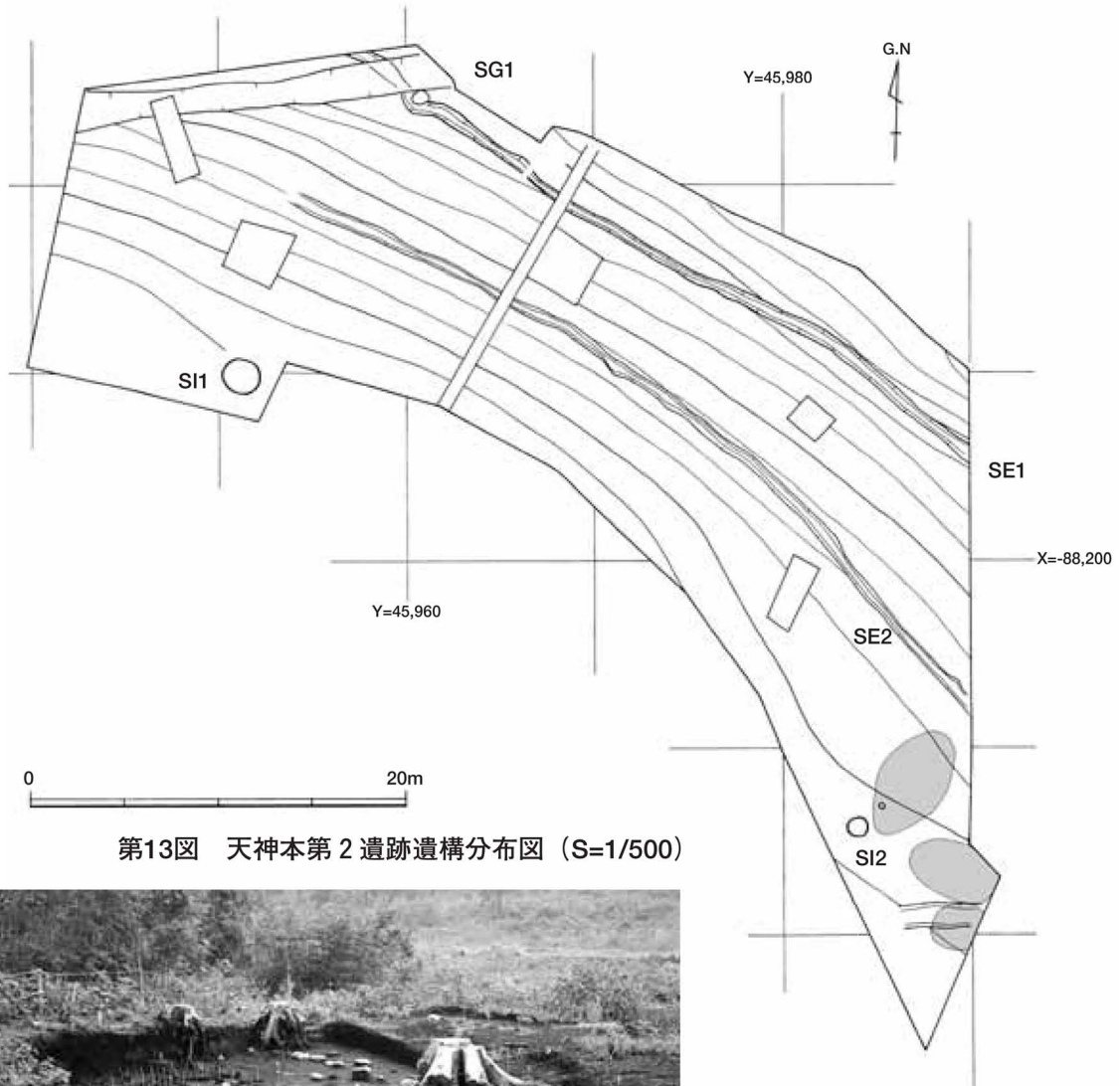
④中世以降

溝状遺構、道路状遺構ともに、指標となる遺物がなく構築時期は判然としないが、SE1→SG1という先後関係は明らかである。SG1は地籍図に表れることから、近代期まで機能していたとみられる。

(3) 小 結

縄文時代早期に属する石器製作跡が検出されたことが最大の成果である。ただし出土土器（押型文系）には複数の型式が認められる。地形からみて、遺物の分布域は南東方向に広がる可能性が高い。

(文責 吉本正典)



第13図 天神本第2遺跡遺構分布図 (S=1/500)



写真6 縄文時代早期 遺物集中箇所

32 おおうちばる 大内原遺跡

(1) 遺跡の立地

本遺跡は上面木山の東麓に位置し、次節で触れる中ノ迫第1遺跡が立地する台地（唐瀬原段丘面）下段にあたり、比高差は約13mである。調査区北東側に篠原川が流れ、地形は西から東へ緩やかに傾斜し、標高約107mである。

(2) 調査の概要

調査対象層は黒色土層（Ⅱa層・Ⅱb層）である。Ⅱa層は台地上から谷部への流入による二次堆積層であり、Ⅱb層上面では中世の遺構・遺物を検出した。なお、K-Ah（Ⅲ層）下位は砂礫が厚く堆積し、篠原川の氾濫原の状況を示している。

① 弥生時代

遺構は全く確認できなかったが、調査区西側において、Ⅱa層から弥生土器が出土した。

② 古墳時代

竪穴住居が1基検出された。出土した高杯と壺から前期のものと考えられる。

③ 中世

調査区西側で土坑（SC1）1基および土壇墓（SD1）が検出された。

SD1は残存部分から、推定長軸1.3m×短軸1.0mの方形を呈し、主軸をほぼ南北にとると考えられる。北隅部より床面からやや浮いた状態で完形の土師器皿3点が出土した。

SC1は埋土に多量の炭化物を含むが遺物はなく、詳細な時期は不明である。

また、Ⅱb層上面からは土師器杯、土師器皿、東播系須恵器が出土している。

(3) 小結

本遺跡出土の弥生土器は細片化が著しく、またⅡa層から出土した点から、台地上から流入したものであると思われる。台地上の中ノ迫第1遺跡においても弥生時代の遺構・遺物が検出されており、本遺跡の弥生土器は中ノ迫第1遺跡に由来する可能性がある。

SD1は出土した土師器皿から13～14世紀の遺構と推測される。また、周辺からも同様の年代を示す東播系須恵器が出土した。（文責 白地 浩）



第14図 調査区と周辺地形（S=1/4000）

33 なかのさこ 中ノ迫第1遺跡

(1) 遺跡の立地

本遺跡は、尾鈴山系の一つである上面木山の東麓にあり、切原川と篠原川にはさまれた標高約120mの台地上（唐瀬原段丘面）に立地する。本調査は、このうち北側の段丘端部（一次調査区）、南側の段丘端部（二次調査区）を対象に実施された。なお、一次調査区の北側低地には大内原遺跡が所在する。両遺跡の比高差は約13mである。

ここでは、一次・二次調査にわけて報告する。

(2) 一次調査の概要

昨年度より実施していた本調査では、調査区南側の比較的大きな埋没谷の黒色土（Ⅱ層）と調査区北側のKr-Kbに相当する褐色土（Ⅵ層）～MB3（Ⅸb層）を調査対象とした。さらに調査区より南に約500m離れた調査地点（G・H-38・39）においてもMB0（Ⅳ層）～Kr-kbに相当する褐色土（Ⅵ層）の調査を実施した。

昨年度の調査で、埋没谷からは、縄文後期の土器や石器及び弥生時代後期後半の土器が出土している。

なお、一次調査における土層の呼称については、

全体的にML2が欠落している等、後述する二次調査とは異なる。

①後期旧石器時代

MB2・3（Ⅸ層）では、ナイフ形石器、スクレイパー、石核、剥片、碎片、敲石、台石が出土し、特にMB2（Ⅸa層）上面ではナイフ形石器、剥片、碎片が集中して出土する箇所がみられた。

また、Kr-Kbに相当する褐色土（Ⅵ層）では、礫群が21基検出された。礫群内の構成礫はほとんどが尾鈴山酸性岩で赤化、破碎が著しい。なかでも剥片を伴うものが8基あった。

Ⅵ層中の遺物は、ナイフ形石器、石核、剥片、碎片、敲石、磨石が出土した。Ⅵ層においても、ナイフ形石器、剥片、碎片の遺物集中箇所を確認した。

②縄文時代早期

土坑が2基確認された。そのうち、SC1はⅥ層で検出されたが、Ⅳ層及びML1（Ⅴ層）の土質や土色の比較から早期の土坑と考えられる。長軸1.2m、短軸1.15mのほぼ円形で、検出面からの深さは最長1mを測る。共伴する遺物は出土していない。一方、SC2はⅣ層で検出された。長軸0.85m、短軸0.65mの楕円形で、検出面からの深さは最長0.17mを測る。埋土中より平椀式土器が出土した。



第15図 調査区と周辺地形 (S=1/5000)



写真9 一次調査 MB2 上面遺物出土状況(東から)

一方、G・H-38・39地点では、Ⅳ層中より石鏃・剥片が少量出土した。

③その他

埋没谷と並行して溝状遺構(ⅤE1)が1条検出された。時期は不明であるが、東西方向に延びており、長さ7m、幅0.8m、検出面からの深さは最大0.12mを測る。

また、埋没谷での黒色土(Ⅱ層)中からは、縄文土器(轟B式・刺突文等)、石鏃、石匙等が出土している。(文責 安藤利光)

(3) 二次調査の概要

本調査区では、傾斜地特有の不安定な堆積状況の部分が見られるが、概ね表土(Ⅰ層)から最下部の礫層(XⅠ層)まで堆積状況は良好である。調査としては、表土を除去後、K-Ah(Ⅲ層)上面からMB3(XⅡ層)の精査をそれぞれ行った。

①後期旧石器時代

後期旧石器時代では、MB3・MB2・Kr-Kbに相当する褐色土・ML2の4枚の包含層を確認した。

MB3(XⅡ層)では、礫群2基を検出し、石核、剥片等数点出土した。

MB2(XⅢ層)では、礫群4基を検出した。遺物としては、スクレイパー、石核、剥片等数多く出土した。特に、4m×5mの範囲に礫群1基及び剥片の集中箇所を検出した。

Kr-Kbに相当する褐色土(Ⅵ層)からは、土坑を1基検出した。また、調査区全体から合計9基の礫群を検出した。礫群内の構成礫はほとんどが尾鈴山酸性岩で赤化、破碎が著しい。出土遺物と



写真10 二次調査 弥生時代竪穴住居検出状況(西から)

しては、角錐状石器、ナイフ形石器、石核、剥片がある。

ML2(Ⅶ層)からは、遺構は検出されなかった。出土遺物としては、剥片が数点あるのみである。

②縄文時代早期

集石遺構2基が検出された。2基とも掘り込みが見られ、埋土の最下層には炭化物が多く見られた。構成礫は、2基ともほとんどが尾鈴山酸性岩で赤化、破碎が著しい。

遺物は、縄文時代早期と思われる土器が出土した。また、石鏃、剥片、碎片等も数多く出土した。

③弥生時代

竪穴住居が、調査区中央部から1軒検出された。2m×2.5mの方形の竪穴住居で主柱穴は4本である。南壁中央部の床面には、炭化物が広がっており、その上に赤化した磨石が出土した。出土遺物は、弥生土器、石包丁、磨石、台石がある。

(4) 小結

後期旧石器時代については、堆積状況は良好な状態で残存している。川南町内は、後期旧石器時代の調査は少なく、今後高鍋町や新富町の遺跡と比較検討し、本遺跡の性格付けを行う必要がある。

弥生時代の遺構として、竪穴住居が1軒検出された。住居跡の時期、あり方からみて、同じ台地上にある中ノ迫A遺跡¹⁾との関連性が強い。

(文責 島木良浩)

註

1) 宮崎県教育委員会「中ノ迫A遺跡」『宮崎県文化財調査報告書』第28集 (1985)



写真7 中ノ迫第1遺跡遠景（南東から）



写真8 二次調査 検出AT下礫群（東から）

35 なかのさこ 中ノ迫第3遺跡

(1) 遺跡の立地

本遺跡は、川南町の北西部から広がる尾鈴山系東麓より派生した舌状台地の突端部（標高90m前後）に位置する。台地の南北には切原川と篠原川が東流している。

(2) 調査の概要

調査対象区は、遺跡の北東側をA区・B区と設定した。A区・B区とも削平・攪乱が著しい。特に、B区西部は大幅な改変により包含層は残存しない。

①後期旧石器時代

現在、B区南側に設定した先行トレンチにおいてMB1下位より礫群の一部と石核・剥片数点が確認されている。

②縄文時代早期

A区・B区ともにMB0（IV層）～ML1（V層）より、集石遺構と土坑が検出された。

集石遺構は、A区で22基、B区に6基検出され、その分布は、大きくA区南半分・B区北東隅・南西隅の3遺構群と確認できる。なお、B区南側の集石遺構群は、調査区外に広がる可能性がある。

散礫は、集石遺構群と重なるように調査区全体で検出されたが、B区南西隅に向かって疎になる。土坑はA区に1基、B区で5基検出され、平面形は円形・楕円形をなす。

出土遺物はA区・B区（MB0～ML1）にて縄文早期前半の貝殻条痕文土器・石鏃・剥片・石核等、さらにB区では押型文土器・局部磨製石斧・打製石斧等が出土した。

特に貝殻条痕文土器は、集石遺構検出層に伴い多量に出土したが、押型文土器は伴わず小破片2点のみにとどまる。さらに、局部磨製石斧・打製石斧はB区の集石検出層より出土し、周囲に同じ石材の剥片を密に伴って出土した。

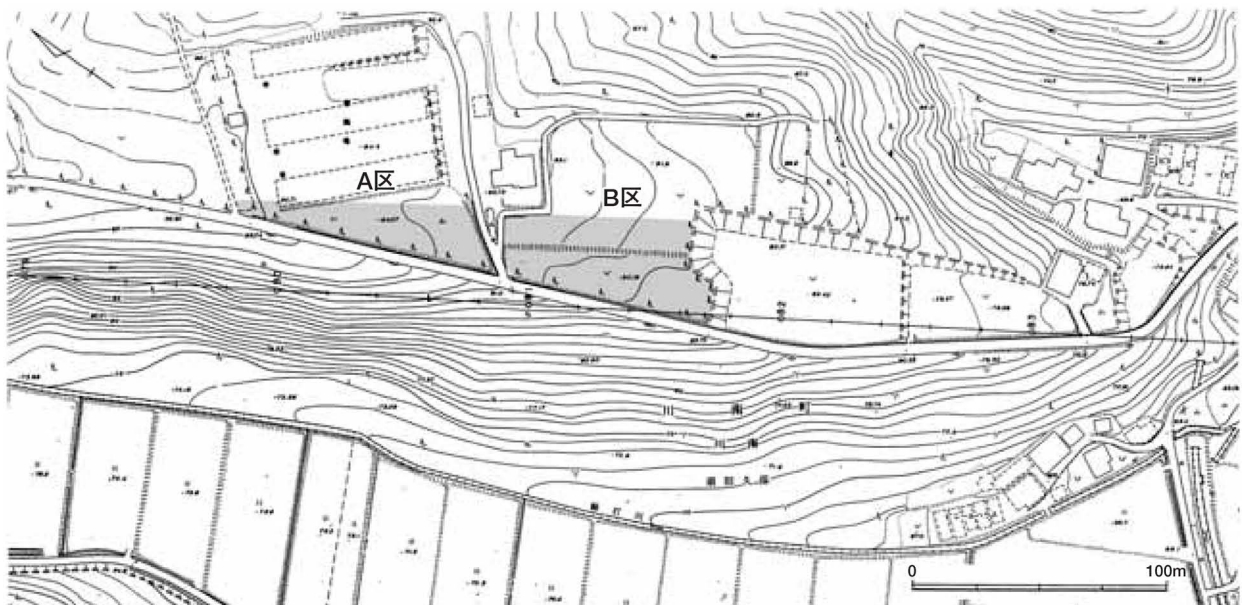
(3) 小結

本遺跡では旧石器時代および縄文早期にて遺構・遺物を確認した。

集石遺構は貝殻条痕土器検出層に伴い、縄文時代早期前半の時期が与えられる。また、石斧類の製作に関しては集石遺構の時期とほぼ同時期に行われた可能性が高い。

後期旧石器時代の調査に関しては、今後MB2（Ⅸ層）の精査を実施する予定である。

（文責 渡辺美幸）



第16図 周辺の地形と調査区（S=1/3000）

39 あかさか 赤坂遺跡

(1) 遺跡の立地

川南台地の中央部を流れる平田川の支流綿打川南側にあり、標高81～86mの丘陵縁辺部に位置する。遺跡の北側は急崖となっており、南側は緩やかに国光原台地へと連なる。北側の崖下に広がる十文字扇状地との比高差は25mを測る。

(2) 調査の概要

本調査では、黒色土（Ⅱ層）を掘り下げて遺構検出を行った結果、弥生時代の周溝墓、周溝状遺構、竪穴住居、中世の掘立柱建物及び溝状遺構等を検出した。遺物は、弥生土器が多数出土したほか、石包丁、磨石、砥石、須恵器、鉄滓等がある。

① 弥生時代後期後半～終末期

円形周溝墓（SM）1基、周溝状遺構（SL）2基、竪穴住居（SA）24軒が検出された。

SM1（巻頭図版5）は、円形プランで周溝を含めた外径は南北軸長12.9m、東西軸長13.2mを測る。標高約86m、調査区北端の丘陵頂部に位置し、崖下に十文字扇状地が、遠くは尾鈴山系が一望できる。

主体部は、東西方向を長軸とした2.4m×1.7mの長方形のプランをなす。埋土の状況から木棺墓または木蓋土墳墓を想定している。主体部からの出土遺物は弥生土器の小片のみに留まる。

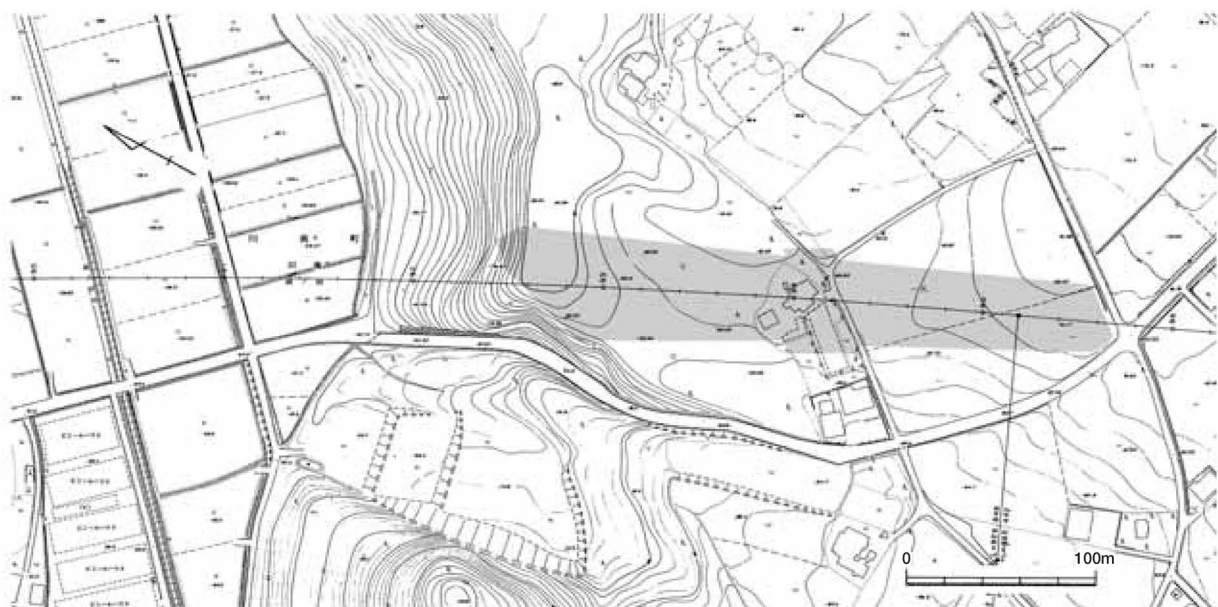
周溝の溝幅は1.6m～2.7m、溝の深さは0.2m～0.4mを測る。周溝の埋土上部からは壺・甕等が散漫な状態で数点出土した。周溝内出土遺物の時期からSM1は弥生時代終末期の時期が与えられる。

SL2は、SM1の南東側に隣接し、南北軸長約9m、東西軸長約7mで、平面プランは方形を基調とする。溝幅は検出時で1.5m～2.0mを測る。周溝埋土上部から高杯が1点出土した。SL2の時期は、高杯の時期から弥生時代後期後半と推定できる。

竪穴住居は24軒検出された。ほとんどの竪穴住居が一辺3～4m級とやや小ぶり、単独で散在するあり方を示している。

このうち、焼失住居と考えられる竪穴住居として、まとまった量の炭化材を検出したSA12及びSA17がある。特にSA12は、花卉形住居で8.0m×7.5mと比較的規模が大きい。床面には炭化材が放射状に広がっていた。

他方、張り出しを有する竪穴住居としてSA2があり、6.2m×6.2mと比較的大型である。



第17図 調査区と周辺地形（S=1/4000）

竪穴住居からは、弥生土器（線刻土器、櫛描波状文土器、円形・棒状浮文土器、瓢形土器等）、勾玉及び石器（石包丁、磨石、石皿、砥石等）が出土している。土器の型式から竪穴住居群の時期は弥生時代後期後半～終末期と考えられる。

②中世

掘立柱建物（SB）4棟及び溝状遺構（SE）7条が検出された。

これらの掘立柱建物は、調査区東側の丘陵裾部に集中する柱穴群内にある。SB1は、9.2m×4.2mの規模で検出し、SB2（8.9m×1.4m）と切り合う。SB4は桁行5間、梁行2間で10.0m×3.9mを測り、SB1とほぼ並行に並ぶ。

溝状遺構は調査区を南北、東西に走り、埋土上部から須恵器と鉄滓が数点出土した。

②その他

時期不明の土坑を10基検出した。これらの土坑については、埋土や周辺から出土した遺物を詳細に観察しながら調査を進めている。

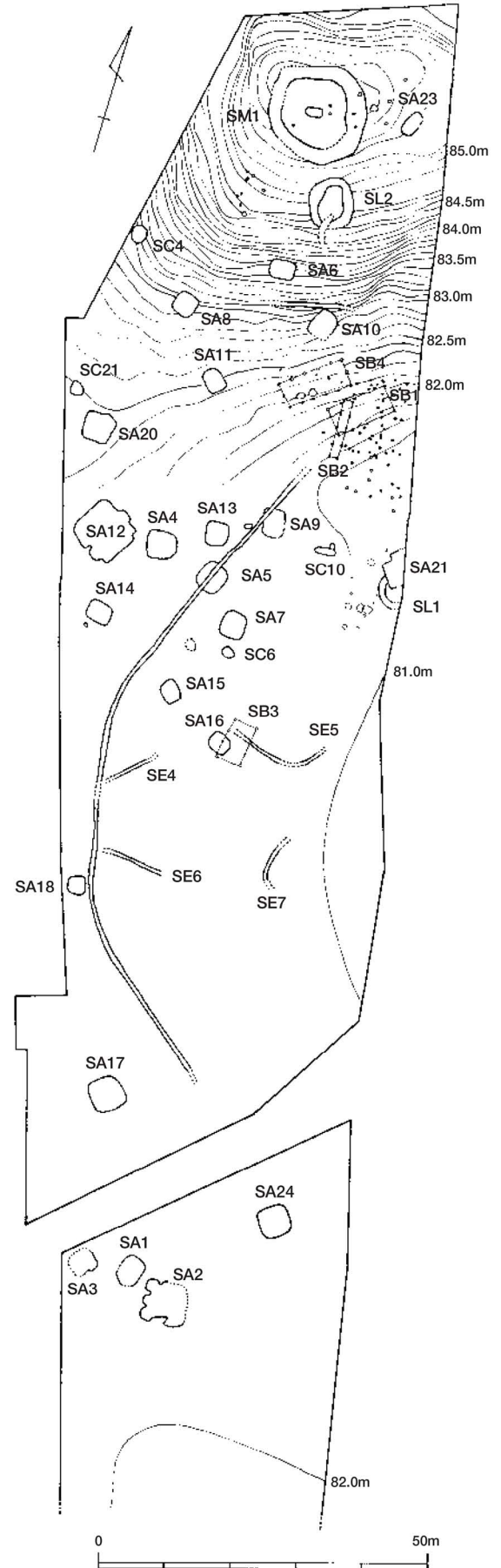
(3) 小結

本遺跡では、弥生時代後期後半～終末期及び中世にかけての遺構や遺物が検出された。

特に弥生時代の円形周溝墓は、県内でも7遺跡36例が確認されるにとどまり、検出例が少ない。また、そのほとんどが平坦面に立地するのに対し、SM1は、丘陵頂部の平場ないし台地縁辺を選んで造営しているという特徴的な立地が特筆される。規模は、同町内で検出された東平下遺跡の周溝墓とほぼ同じであり、県内検出例と比較した場合やや大きめの周溝墓となる。全容が明らかになれば、当地域の古墳出現期前夜の墓制として貴重な情報が得られるものと期待される。

竪穴住居跡は、その多くが3m～4m級とやや小ぶりであることも特徴的である。この集落の変遷過程及び周溝墓との関連性も注目できよう。

(文責 興梶慶一)



第18図 赤坂遺跡遺構分布図 (S=1/1000)



写真11 赤坂遺跡調査区遠景（北から）

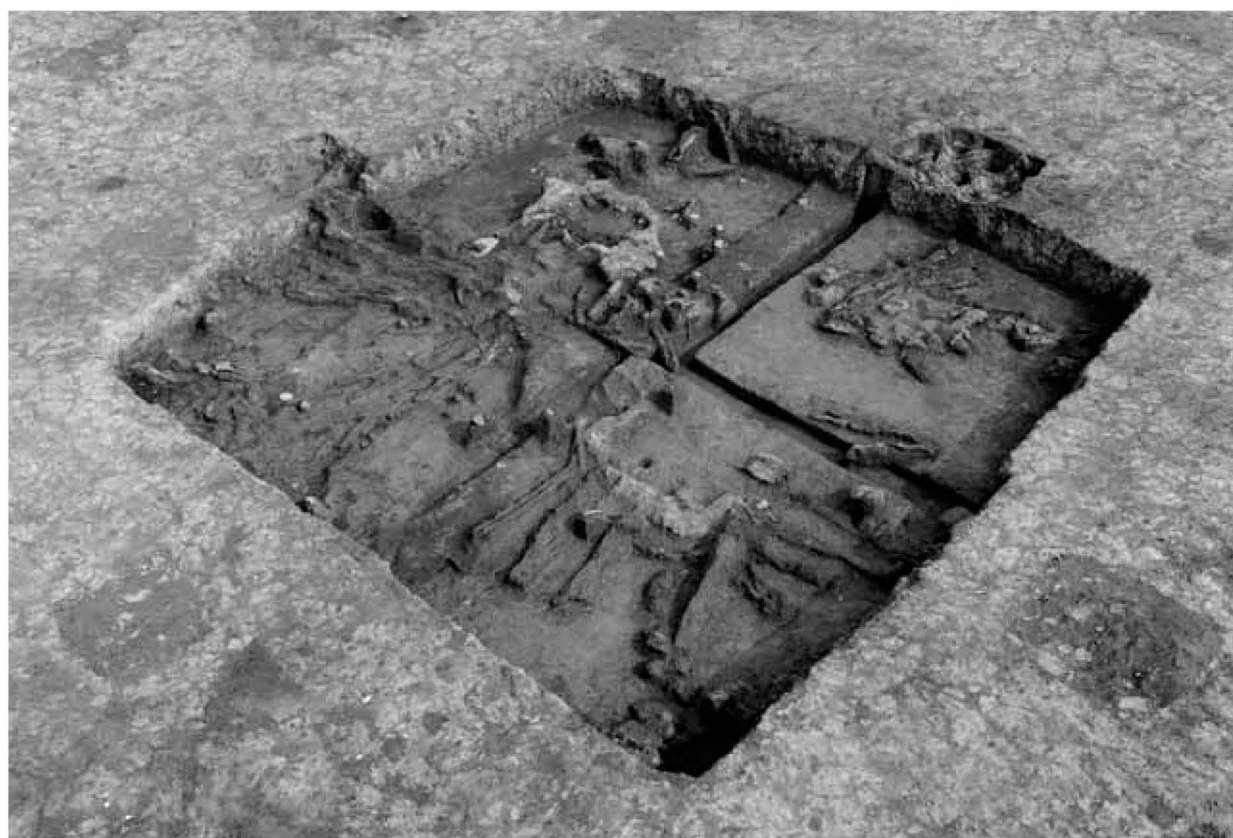


写真12 SA17炭化材検出状況（東から）

40 こっこうばる 国光原遺跡

(1) 遺跡の立地

本遺跡は、平田川と切原川に挟まれた国光原台地の南側縁辺部に位置する。調査区は、南東に向かって緩斜面になっており、標高は63m～74mである。本遺跡の南側に位置する湯牟田遺跡は、その緩斜面につらなる平坦面に位置する。

(2) 調査の概要

調査区の大部分は、茶栽培や土地改良に伴う削平や攪乱による地形の改変が著しい。また、本遺跡内には墓地があったが、現在は遺跡の西隣に移転している。調査区を横切るように農道があり、これを挟んで北側をA区、南側をB区と設定した。A区の調査は、K-Ah（Ⅳ層）、MB0（Ⅴ層）、ML1（Ⅵ層）、Kr-Kb（Ⅶ層）、MB1（Ⅷ層）の各層で精査を実施した。

①後期旧石器時代

A区において、ML1（Ⅵ層）上面から細石刃、剥片、Kr-Kb（Ⅶ層）から石核、剥片、MB1（Ⅷ層）から角錐状石器と剥片が出土した。いずれも遺構は検出されていない。

②縄文時代早期

A区・B区ともにK-Ah下のMB0層からは、縄文時代早期の遺構や遺物が検出されている。

A区南西部のMB0層中位よりやや下の部分で、集石遺構が3基検出されているが、この層位では、塞ノ神式土器及び剥片が出土した。

また、A区南西部MB0層下部では、散礫と2基の集石遺構が検出された。散礫は、南西部を中心に礫が広がっており、南西部で比較的密集し、南西部分から遠くなるにしたがい徐々に薄くなる。この散礫中に南西部で1基、南側中央部で1基集石遺構が点在する。

遺物は押型文土器と剥片がある。

一方、B区の中央付近では、炉穴が3基以上切り合った状態で確認された。今後、調査の進行にともない、集石遺構の検出が予想されると同時に、すでに検出された炉穴は、更に増えることが予想される。

③弥生時代後期後半

A区のK-Ah上面で、竪穴住居7軒、周溝状遺構1基、土坑12基を検出した。これらの遺構は、出土遺物から弥生時代後期後半と考えられる。

竪穴住居は方形プランを基調とするものが主体であるが、プランが不明なものも1軒あり、花弁形住居と考えられるものも1軒検出された。その



第19図 調査区と周辺地形 (S=1/4000)



写真13 A区 集石遺構と散礫の検出状況（北から）



写真14 SA3遺物出土状況（東から）

うち貼床は2軒で確認されている。出土した遺物は、甕、壺、高杯といった弥生土器や石包丁、砥石、磨石などがある。

一方、周溝状遺構は、調査区東側の境界付近で検出された。遺構の半分以上が調査区外に広がるが、1辺約6mの隅丸方形プランを呈すると考えられる。溝の幅は約0.7m、深さは約0.25mであり、出土した遺物は甕・高杯などの弥生土器がある。

土坑は、12基検出された。平面形は、10基が円形ないし楕円形プランを呈しており、直径0.4～1.0m、深さ0.1～0.3mである。またプラン不明のものが1基あり、方形プランで1.6m×1.45m、深さ0.25mのものが1基ある。

④中世

溝状遺構がA区とB区を合わせて5条以上検出されている。幅は最大で0.65m～0.9m、深さは0.1～0.4mほどである。東西方向や南北方向へ錯綜して走る状態を示す。これらの溝状遺構群からは、東播系の播鉢、ヘラ切り底の土師皿がわずかに出土したのみで時期の判別は困難である。

⑤時期不明

A区の南側より、長径1.4m前後の楕円形プランで深さ0.4～0.5mほどの土坑2基、A区東側および南側から直径0.5～0.6mほどで、深さ0.1mほどの黄色ないし灰色の粘土を有する円形土坑3基が検出された。ともに遺構の時期を判断する遺物は出土していない。

なお、楕円形プランの土坑2基については、付

近に近世後期から営まれていた集団墓地があったことから、土壙墓の可能性はある。

(3) 小結

国光原遺跡では、後期旧石器時代～中世の遺構と遺物が得られた。なかでも弥生時代の集落が検出されたのは注目できる。

本遺跡の南隣には、弥生時代の集落が確認された湯牟田遺跡があり、本遺跡の集落と時期的に併行する弥生時代後期後半の住居群が検出されていることから、両遺跡の関連性を考えられる。

しかし、湯牟田遺跡のすぐ北隣に位置する本遺跡の緩斜面（B区）では、弥生時代の遺構が空白となっていることを、どのように評価していくかなどの課題もあげられよう。

さらに、前ノ田村上第1遺跡や赤坂遺跡の調査例と同じく、本遺跡でも周溝状遺構が検出された。この遺構の存在は、弥生時代の集落構成を考える上で鍵となる。 (文責 安藤正純)

41 湯牟田遺跡（二次）

（1）遺跡の立地

本遺跡は小丸川とその支流の切原川を南に望む国光原台地の南部に位置し、標高約63mを測る。調査区北側には緩やかな谷筋が東西に走り、それより北側には一段上がった緩斜面上（標高約74m）に国光原遺跡が所在する。一方、南側は南東に向かい微丘陵の地形を呈する。また同台地上には川南古墳群が、南東側の高城段丘面上には持田古墳群が展開する。

（2）調査の概要

二次調査は15年度から継続調査中で、現在D区の調査を進めており、弥生時代中期～終末期の竪穴住居（SA）24軒・独立棟持柱建物（SB）1棟、中世の溝状遺構（SE）13条、掘立柱建物34棟、土坑、小穴群が検出された。

遺物は弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等が出土している。

①縄文時代早期

現在、集石遺構が2基検出された。D区北東隅及びE区SA5貼床下よりの検出である。今後、調査の進展により基数の増加が見込まれる。遺物は、縄文土器、石器が出土している。

②弥生時代中期末～後期初頭、後期後葉～終末

ここでは、弥生時代中～終末期の竪穴住居等の様相を細分時期ごとにその概略を述べることにしたい。

〔中期末～後期初頭〕

当該期の竪穴住居はSA 22～24の3軒が挙げられる。いずれもD区の北東際に位置する。SA 22のプランは不明瞭で、方形プランのSA 24に先行する。SA 22より出土した下城系甕等から中期末～後期初頭に比定される。

他2軒についても、前後関係や位置関係からみると同様な時期となる可能性がある。これら3軒は谷筋を挟んで南側に展開する、本遺跡における弥生時代集落の中心となる後期後葉～終末期の竪穴住居群に先行すると考えられる。



第20図 遺跡周辺の地形と調査区（S=1/4000）



写真15 湯牟田遺跡調査区遠景（東から）

〔後期後葉～終末〕

竪穴住居21軒（SA1～21）、独立棟持柱建物1棟（SB3）、土坑数基がある。

特に、焼土や建築部材と推定される炭化材が多量に検出される焼失住居（あるいは火災住居）が9軒確認された点は注目できる。以下、これらの竪穴住居の諸特徴について項目ごとに概説する。

〈分布状況〉調査区南東部分を中心に広がり、調査区外の南東側にも展開すると推定される。一方、竪穴住居群の空白域となる南西部には独立棟持柱建物（SB3）が位置するなど、集落構成の一端を示す。

〈平面プラン〉多くの竪穴住居は方形を基調とするが、SA3のようにD字状を呈するものもある。また、花卉状住居3軒（SA5・7・13）、張り出しを有するもの5軒（SA2・9～11・16）もある。

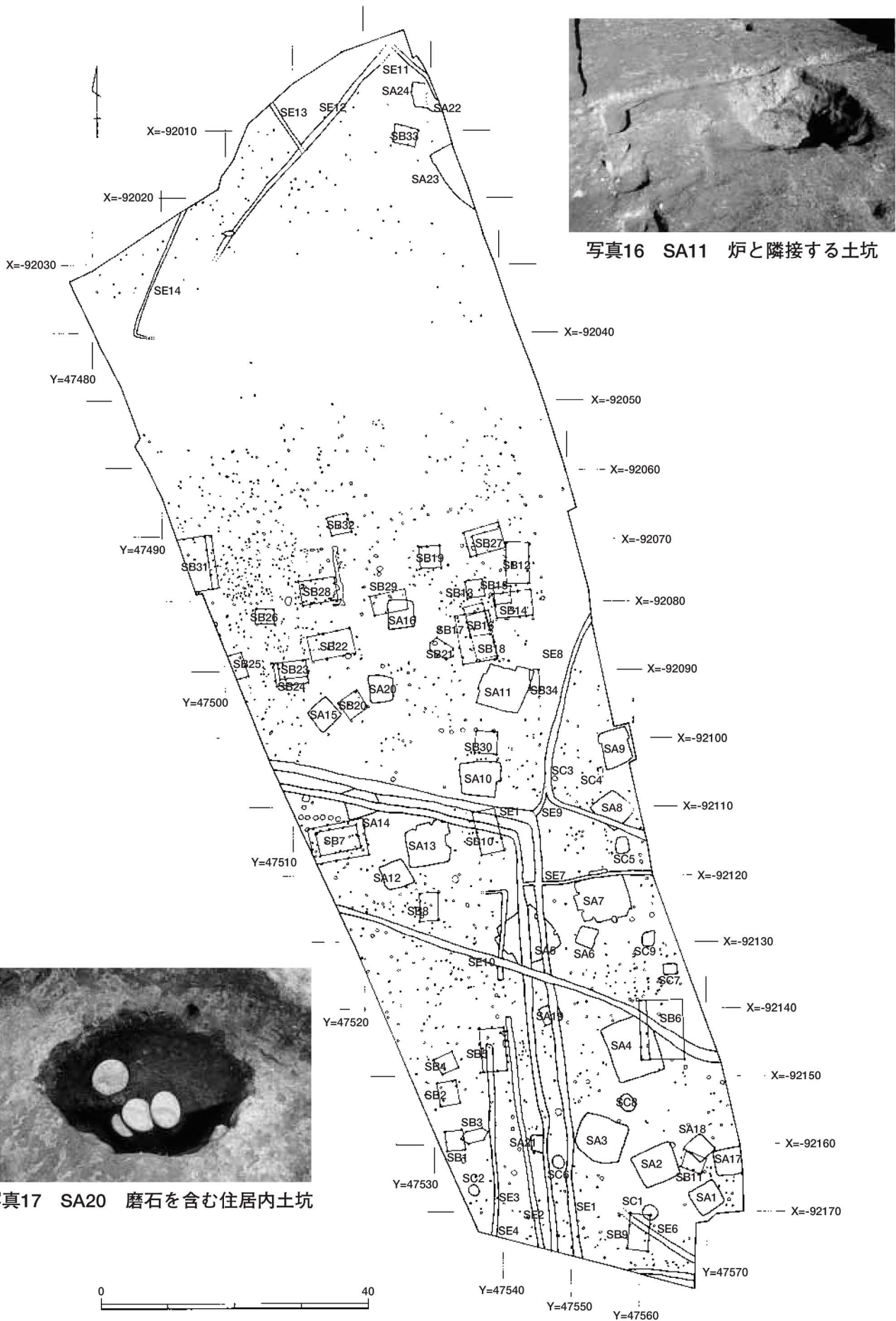
〈平面規模〉長軸の長さが7m級の大型・5m級の中型・3m級の小型というように大きく三区分

でき、花卉状住居はすべて大型の部類に入る。竪穴部掘り方底面は、大型の住居の場合、MB0まで掘り込まれるが、小型の場合はK-Ah内おさまるなど、住居規模と掘り方底面レベルの深浅に関係がみられる。

〈柱 穴〉主柱穴は、6本柱（SA5）・4本柱・2本柱・1本柱（SA12）・無柱があり、平面規模との関連が指摘できそうである。なお、主柱穴が2本柱場合、棟方向はおよそ東西を指向する。

〈貼 床〉貼床は、小型の竪穴住居以外でみられた。貼床の土はK-Ah～MB0層土ブロックの混合土であるが、SA13のように、南側壁と柱穴間の方形を呈する範囲にML1層土のみの貼床がなされるなど、意識的な使い分けも見出せる。

〈炉〉小型の竪穴住居を除くほとんどの場合、およそ床面中央部に、床面付近と推定される焼土を含む比較的浅い窪みが検出された。SA10の床下付近の埋土からはフローテーション法によりコマやドングリ等の炭化種子が検出されている。



第21図 弥生時代・中世遺構分布図 (S=1/800)

〈住居内土坑〉SA2・5・11・16等では、炉に近接して平面規模0.5～0.9m・深さ0.3m程度の土坑が1基ずつ検出されており、炉と何らかの関連性があるものと考えられる（写真16）。

これらの住居内土坑は他にも、住居の壁際で検出される場合が多い。この場合、直径0.3m前後の円形プランでほぼ垂直に掘られているものが多く、磨石が出土する例もある（写真17）。また、SA2・13のように壁際で2、3基が近接して検出される場合もある。壁際で検出される土坑の機能としては、貯蔵穴の可能性も考えられるため、フローテーション法による微細遺物の検出を進めている。

〈壁帯溝〉小型の竪穴住居以外のほとんどで壁帯溝が確認された。地山に掘り込まれるものは少なく、壁と貼床土の間で検出された。

〈出土遺物〉竪穴住居内より弥生土器（甕・壺・鉢・高杯・器台）、鉄器（鉄鍬・板状鉄斧・鉈・鏝）、石器（磨製石鍬・石庖丁・磨石・砥石・敲石・台石）等が出土した。板状鉄斧はSA7より出土である。SA3（焼失住居）では、住居の焼失に伴い炭化したと考えられる鋤などの木製品が東壁際で検出された（表紙写真）。

〈焼失住居〉焼土と炭化材の伴うことが多く、焼土は概ね炭化材の上に被さる状況で検出された。

SA2の炭化材は、中央から外に向かって放射状に伸びるものが多数と、それに直行するものが認められ、それぞれ垂木と桁（または梁）と推定される。さらに、焼土と炭化材の間に茅とみられる植物性繊維質が少量検出された。これら焼土と炭化材は、住居の上屋構造を復元する上でも重要性を持つ。

③中世

溝状遺構13条（SE1～9、11～14）、掘立柱建物34棟（SB1～35）、土坑3基（SC4・7・9）が検出された。調査区南半では、SE1～4及びSE8が南北へ伸び、調査区中央付近でSE1・2は直角に近い角度で西へ、SE8は東へ屈曲する。SE3・4は屈曲せず、SE3は一定間隔が途切れる。いずれも断面形状は弓形または方形で、幅に大きな差はないが、検出面からの深さ

はSE1・3が比較的深い。この溝状遺構群に囲まれるように、且つその周辺に多数の掘立柱建物が検出された。

遺物は量的に少ないが、SE1では多量の礫とともに、東播系・備前系・常滑系・古瀬戸系といった陶磁器と竜泉窯系の青磁及び白磁があり、溝状遺構群及び掘立柱建物群の時期は、凡そ12～14世紀の時期が与えられよう。

一方、調査区北端では斜面裾部に沿うように南西から北東に伸びるSE12・14、SE12に直交するSE11・13を検出した。この遺構群は断面形状に差異があり、SE12・13は弓形または方形、SE11・14は逆台形をなす。遺物は須恵器、土師皿の小片と礫が出土したのみで詳細な時期は不明である。

（3）小結

特に注目されるのは、弥生時代後期後葉～終末の竪穴住居群のなかで多数の焼失住居が検出されたことである。焼失住居は弥生時代後期後半を中心に類例が多く、県内はもとより全国各地で確認されており、住居構造の復元や火災要因に関する議論を中心に注目度は高い。当遺跡でもこれら全国的な調査類例の脈絡の中での評価が求められる。

一方、SA3検出の炭化鋤は同様の検出状況は類例が少なく資料的な価値は高い。また、SA7出土の朝鮮半島製板状鉄斧も宮崎平野部における鉄器使用の動向を考える上で重要な資料となる。

焼失住居や出土遺物の評価、さらに竪穴住居内の空間利用や建物としての性格、集落の時期的変遷や景観を考察するとき、必要不可欠なのは、調査類例の集成や調査所見の批判的検討や遺物の位置付けであり、特に湯牟田遺跡における弥生土器編年の確立が急務であることは言うまでもない。

中世の集落では、本遺跡と類似した集落構造をもつ前ノ田村上第1遺跡・銀座第1遺跡との比較検討を通じて当該期の集落の様相が明らかにされよう。

（文責 吉富俊文・松元一浩）

42 にし の びゅう 西ノ別府遺跡

(1) 遺跡の立地

川南町北西部に広がる国光原台地の南部に位置し、標高は約60mを測る。調査区は丘陵と台地平坦面との境に立地し、南方向に緩やかに傾斜している。また調査区南端には東西に谷があり、本遺跡と尾花A遺跡との境界となっている。

(2) 調査の概要

調査はK-Ah（第Ⅲ層）上面で検出を行い、順次掘り下げた。その結果、調査区南側を中心にK-Ah（第Ⅲ層）、MB 0（第Ⅳ層）、褐色ローム（第Ⅵ層）において、近世から後期旧石器時代の遺構・遺物を確認した。また調査区北側は後世の改変のため旧地形の大半が削平されており、本調査対象区からは除外している。

①後期旧石器時代

褐色ローム中位から礫群1基が検出された。小形の礫から構成され、赤化礫などは含まれていない。礫群以外にこの時期に伴う遺構・遺物を確認できていない。

②縄文時代早期

MB 0からは散礫2基が検出された。しかし周

辺の攪乱跡からは多量の赤化礫が出土しており、本来は集石遺構の一部であった可能性が高い。周辺からは塞ノ神式土器片・石鏃・チャート剥片などが出土している。

③弥生時代終末～古墳時代初頭

調査区南側、K-Ah上面で竪穴住居1軒が検出された。6m×6mの隅丸方形プランを呈しており、埋土中から仿製重圏文鏡が1面出土している。

④近世

溝7条とピット群を検出した。溝には直角に曲がるものもあり、以前建てられていた宅地の区画に伴うものと考えられる。遺物はピット内から19世紀代の薩摩焼の土瓶片が出土している。

(3) 小結

本遺跡で検出された竪穴住居は1軒のみであり、隣接する湯牟田遺跡、尾花A遺跡でいずれも20軒以上の竪穴住居が検出されたのとは対照的な様相である。周辺遺跡の検出状況を考えると単独で存在するとは考えにくく、調査区外に広がる集落の一部の可能性もある。また調査区北側は近世の遺構を除くと完全な空白地となっており、湯牟田遺跡との境界域を現すと考えられる。

(文責 三品典生)



第22図 調査区と周辺地形 (S=1/4000)

43 おばな 尾花A遺跡

(1) 遺跡の立地

小丸川左岸の国光原台地末端にあたる平坦な海岸段丘縁辺部に立地しており、標高は約57mである。調査区の東・西・南側は急傾斜の崖面となっており、台地は南に小さく突出したような形状を呈している。段丘下の沖積平野部との比高差は約45mである。崖下を巡るように尾花川が流れ、さらに南には小丸川支流の切原川が南東方向へ流れている。また遺跡の北部は谷地形になっており溜池が存在しているため、往時の水源であった可能性も考えられる。

(2) 調査の概要

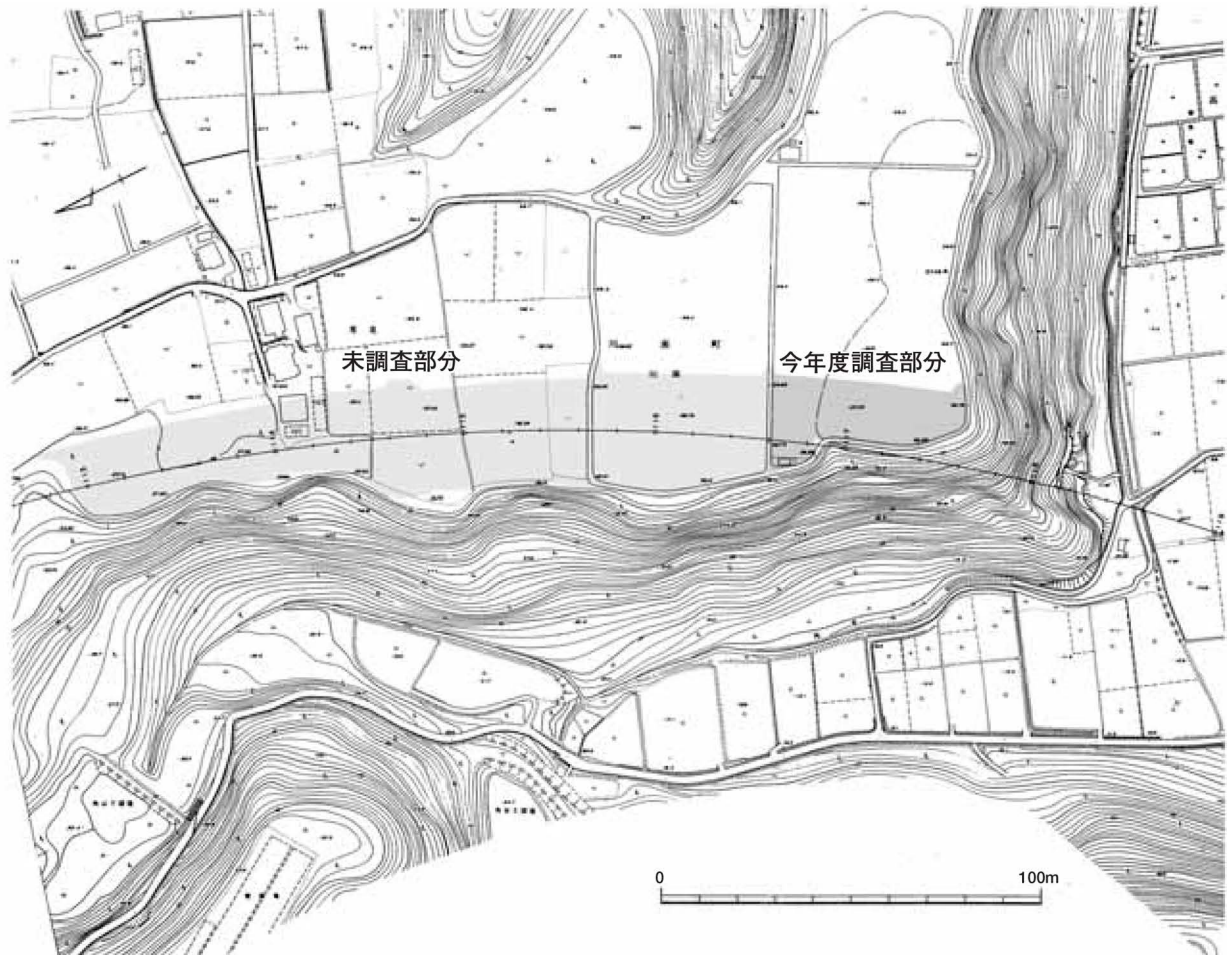
K-Ah二次堆積層(Ⅳa層)及びK-Ah一次堆積層

(Ⅳb層)上面で弥生時代終末～古墳時代初頭を中心とする時期の集落を検出し、またML1(Ⅴ層)上面で縄文時代早期の集石遺構を検出しており、これらを調査対象とした。現在は弥生時代終末～古墳時代初頭の遺構を調査中である。ただし、調査地は茶畑に利用していたため、攪乱を受けている部分が多い。

表土及び耕作土、攪乱土からは縄文時代、古代、近世の遺物も出土している。

① 縄文時代

遺構は現段階でML1上面にて集石遺構が10数基確認されており、さらに増える見込みである。遺物は尖頭器および水晶製打製石鏃がML1より出土している。その他に耕作土や攪乱土より縄文土器(押型文土器・曾畑式土器・黒川式土器)および石器(打製石鏃・打製石斧・尖頭器・石核・剥片・碎片)が出土した。



第23図 調査区と周辺地形 (S=1/2000)



写真18 尾花A遺跡遺構検出状況（西から）

②弥生時代終末～古墳時代

遺構は竪穴住居33軒、土坑3基、溝状遺構3条、不明遺構5基、ピット群が確認されているが、現在も精査中でありさらに増加する可能性は高い。

主な遺物としては弥生土器、土師器、石器（磨製石鏃・石包丁・磨石・台石）、鉄器（鉄鏃・刀子）などが挙げられる。

竪穴住居群はその大部分が切り合い関係にあり、調査区のほぼ全面に広がる。また、調査区北側ではややいびつなプランの土坑が数基、そしてピットが多数検出されているが、明確な掘立柱建物は確認されていない。ただし現在も調査中であり数棟の掘立柱建物の存在が想定される。

これら竪穴住居群は調査区西側、すなわち丘陵縁辺部ほど密集度が高いようである。遺物としては弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての土器群が多く出土しており、この集落が中心的に営まれた時期と考えられる。それぞれの住居埋土の土質は類似しているため、先後関係の判断が困難な状況である。このほか、上記の時期の遺構に埋土とは土質・土色の異なる遺構が数基確認されており、他の遺構に切られることがないため時期を異にした遺構と思われる。

このうちの竪穴住居と考えられる遺構の中央部分にて土器埋設炉が確認されているため、古墳時代中期以降の遺構群である可能性がある。

③古代～中世

遺構は確認されておらず、攪乱土から古代の遺物として8世紀頃と考えられる須恵器杯が、中世の遺物として土師器、青磁などが出土している。

（3）小結

当遺跡の中心となる時期は弥生時代終末から古墳時代初頭であるが、縄文時代早期から中世までの遺物や遺構が確認された。時期を違えて遺構が存在していた可能性が考えられる。検出された遺構群はほぼ全てが切り合い関係にあり、周辺遺跡で普遍的に見られる遺構が単独で存在する様相とは明らかに異なるものであり、弥生時代終末から古墳時代初頭の間断続的に集中的に営まれた集落と考えられる。

今後の調査によって集落の性格を明確にした上で、それを踏まえて周辺遺跡との関係や生産体制、流通などの問題についても言及を試みたい。

（文責 大野義人）

46 ^{のくび}野首第1遺跡

(1) 遺跡の立地

小丸川の右岸、丘陵が複雑に入り組みつつ展開する青木段丘裾の開析谷に位置する。調査区は北東に向かって下る谷の大部分を含むが、斜面のほぼ全面にわたって段違い状に平場が認められる。標高は20～30mを測り、調査区内での高低差が大きい。

北西側に県道改良工事に伴う野首第1遺跡が隣接し、両遺跡にまたがるように野首古墳群（2基確認）が存在している（第24図）。

(2) 調査の概要

調査区をA～C区に分け、平成14年度から順次調査を行ってきたが、本年度はA区北側斜面（古墳群前面）とC区低湿地層の一部について調査を実施した。

①縄文時代

今回の調査区内では、遺構は検出されなかった。

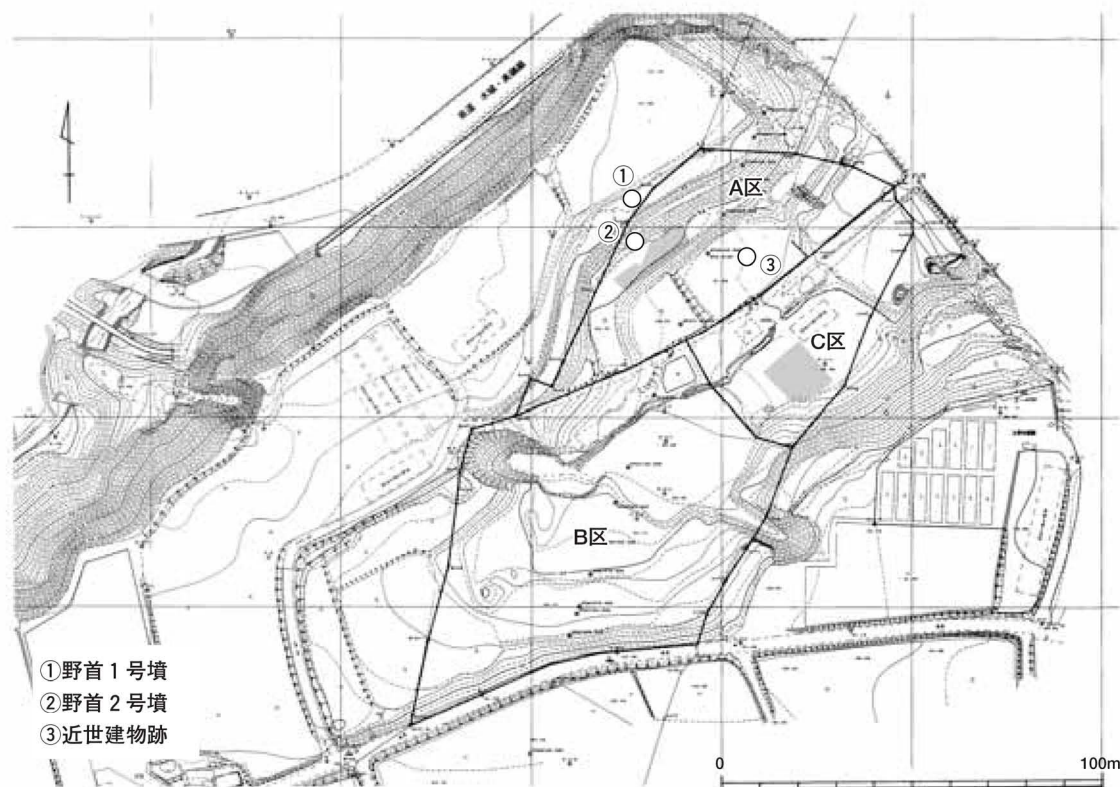
A区で縄文土器（早・前・後期）、石器（石鏃・石錘など）が少量出土しているが、台地上（県道改良工事に伴う野首第1遺跡：平成12年度調査）からの流れ込みと考えられる。

②古墳時代後期～終末期

A区野首1・2号墳の前で検出されていた溝状のプラン（SX6～8：写真19）は、精査の結果、非常に浅い溝状遺構となることが判明した（写真20・21）。その後、SX6の東側に新たなプランを検出したため（SX10）、総数4条となった。

このうちSX6・8からは近世陶磁器も出土しており、帰属時期については判定が困難であったが、主体となる遺物は土師器・須恵器であり、その出土状況から少なくとも古墳時代には溝状の形態をとっていたと判断している。

その性格については断定しづらいが、須恵器提瓶・甕や赤彩・ミガキのある土師器が少なからず出土しており、それらは平成12年度に調査された古墳石室内や周溝出土の遺物とほぼ同時期の所産と考えられる。このため古墳との関係が深そうであり、墓道の可能性も想定している。



第24図 調査区と周辺地形 (S=1/2000)



写真19 A区SX6~8検出状況（西より）



写真20 A区SX8調査状況（南東より）



写真21 A区北側斜面完掘状況（南より）



写真22 C区水田跡完掘状況（北より）

③近世以降

C区で検出された遺構は、平面プランから①畦畔によってほぼ長方形に区画されること、土層断面から②畦畔間の平坦面が水平に近いこと、③畦畔下半が抉れるように浸食された痕跡があり、一定のレベルまで水を湛えることがあったと推測されることなどから、水田とほぼ断定できそうである（写真22）。

なお水田の形成プロセスについては、①中世以来ジメジメとした湿地になっていたであろう谷の底から南側斜面にかけて、比較的レベルの高い部分を削り取る。②一方でレベルの低い（そして、より軟弱な）部分については瓦・礫・陶磁器などを投げ込み地盤改良を行う。③さらに精製した泥でその上を塗り固め、水田の基盤や畦畔を形成するという復元が可能である。

その形成時期については、造成土中の磁器碗では広東碗・端反碗が主体を占めることから、1820年代を前後する頃と推定している。一方、廃絶時期については、水田面をパックする黄白色の砂礫土は調査区付近では基盤層を形成するものであり、自然に流入するとは考えづらいため、大正末～昭和初期の軽便鉄道建設計画に伴う掘削土の可能性

を想定している。このため水田の存続期間は1820～1920年代中に限定できそうである。

（3）小結

古墳時代に属する可能性のある溝状遺構について、墓道の可能性を想定したが、類例として熊本市つつじヶ丘横穴群をあげたい。横穴墓の事例であるが、複数の墓が共有する大規模な前庭部～墓道に小穴・テラスなどが伴うものである（美濃口2002）。

本遺跡についても、溝状遺構の周囲にピット群が広がっており。近世以降の削平を受けたにも関わらず、ほとんどのピットが深さ0.5～0.6mを残していた。古墳群はいずれも横穴式石室を主体とするが、2号墳は斜面中腹に立地することからも、横穴墓との類似性を指摘できる。

水田跡については、存続期間の絞り込みには至っていないが、近世屋敷に伴うものと考えたい。

（文責 堀田孝博）

《参考文献》

美濃口雅朗 2002 『つつじヶ丘横穴群 発掘調査報告書』熊本市教育委員会

47 のくび 野首第2遺跡

(1) 遺跡の立地

小丸川流域の左岸中程、現在の海岸線からはおよそ3.7kmのところ野首第2遺跡は所在する。遺跡は小丸川を北東に望む舌状台地（高位河岸段丘面：岡富面）に展開する緩斜面（傾斜度8°以上15°未満）上にある。標高はおよそ35m前後を測る。

野首第2遺跡の立地上の特性は、巨視的に捉えれば、町域の基盤をなす大小規模の「原」^{はる}地形が、小丸川が形成する沖積低地と接する縁辺部に分布する他の遺跡（下耳切第3遺跡、老瀬坂上遺跡など）と同様のものとして理解できる。だが、小丸川に向かって一段下って舌状に張り出す地形は、近辺と比較しても独特の感がある。

遺跡の北側（野首第1遺跡）と南側（南中原第1遺跡）には、それぞれ現在も湧水点を認め、通時的にも絶好の水利環境にあったことが窺われる。

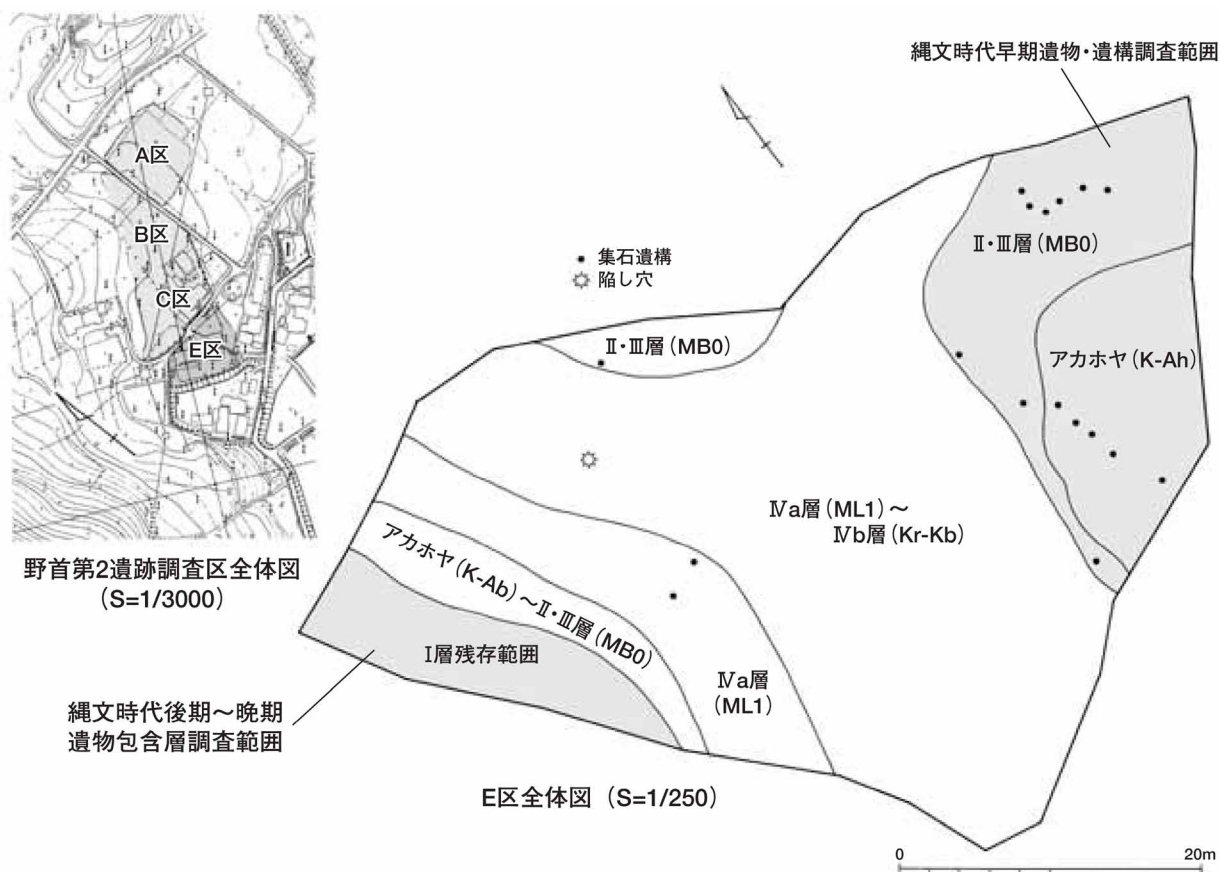
(2) 調査の概要

昨年につき、B・C区の調査を行った。いずれの調査区においても旧石器時代包含層を対象とした。B区ではAT上位を中心とした石器群・礫群が出土し、C区ではAT下位からも遺物・遺構が確認された。その他、新に検出した縄文時代早期の遺構もある。

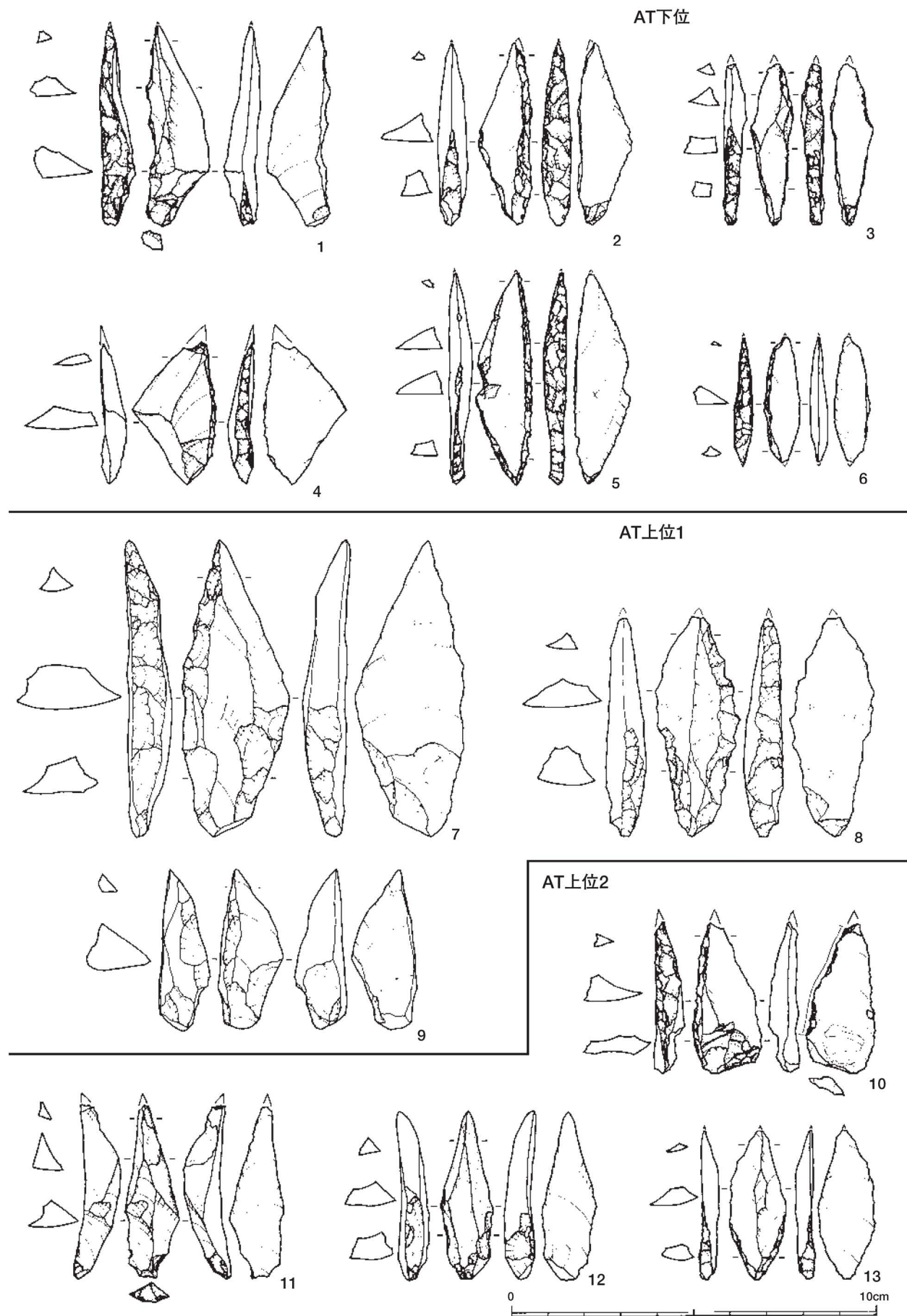
11月からは、C区の南側に位置するE区（2,100㎡）の調査を開始した（第25図）。後期旧石器時代、縄文時代早期の遺構・遺物が出土している。

①後期旧石器時代

B・C区において、MB3（Ⅷ層中～下部）およびMB2（Ⅶ層上部）を出土層準とするAT下位黒色帯石器群、AT直上（Ⅵ層直上）、MB1（Ⅴ層）、Kr-Kb（Ⅳb層）、ML1（Ⅳa層）を出土層準とするAT上位石器群が確認された。C区では、これまで本遺跡では断片的に資料にとどまっていた細石刃石器群も一定規模の分布が認められた。



第25図 E区（今年度新規調査）全体図・周辺地形



第26図 旧石器時代の遺物 (S=2/3)

特筆すべき遺構として、埋土上部をKr-Kbが占める陥し穴が1基確認されたが、時期判定にはなお慎重である必要がある。このほか、旧石器時代の礫群は各細別時期を併せて300基近い確認数を数える。

第26図には、現在整理中の後期旧石器時代資料のうち、AT直下～MB2上部出土のナイフ形石器と、AT上位MB1中部の鋸歯状加工のナイフ形石器およびMB1上部～ML1を中心に出土したナイフ形石器終末期と推定されるナイフ形石器を図示した。

AT下位黒色帯上部のナイフ形石器は、二側縁加工を主として、一側縁加工の資料がこれに加わる。素材の用い方は多様であるが、いずれの資料もブランチングによる素材の変形が著しい特徴を有する。頁岩、ホルンフェルスなどの近傍地産と思しき石材を用いる。AT直下ではこのほか、緑色チャートの板状剥片を折断分割した台形様石器も確認された。

ナイフ形石器終末期と推定される資料は、基部加工および先端加工を主として、素材剥片の打面を残置するものが多い。また、背面に剥片素材石核のポジ面を配する資料も散見される。こうした特徴から、大分県岩戸遺跡6層上部出土の石器群

に対比できよう。

②縄文時代

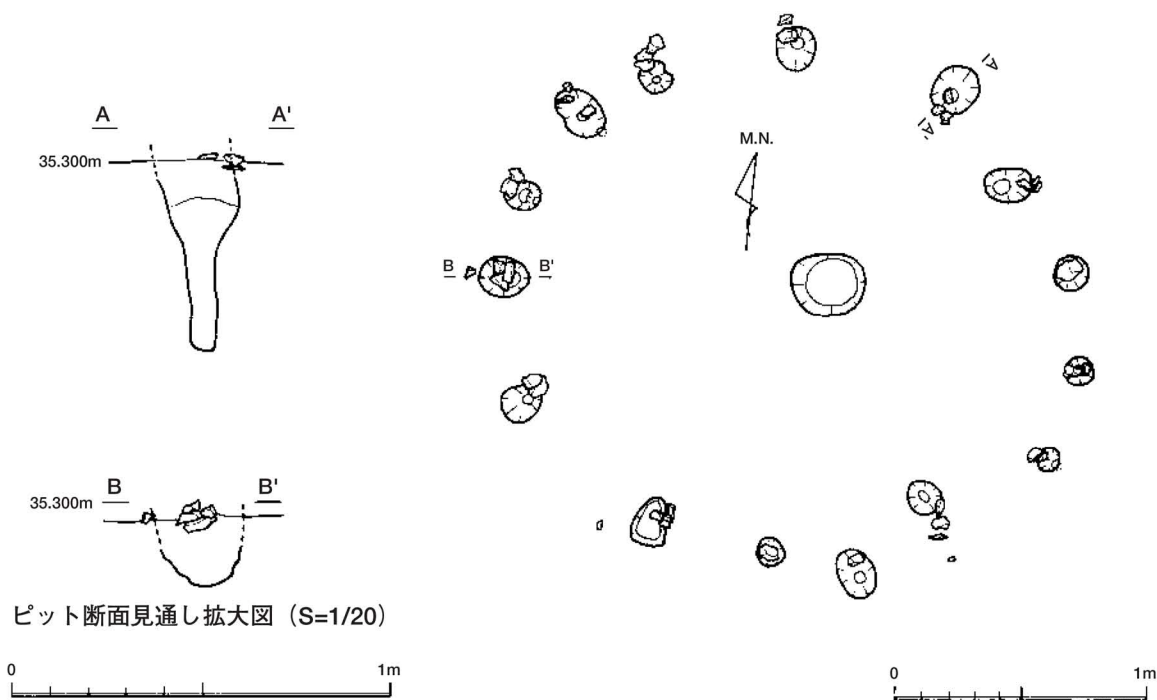
A〔早期の遺構〕

B区からは新たに、縄文時代早期に帰属する可能性が高い、礫を伴う環状ピット群が3基確認された。

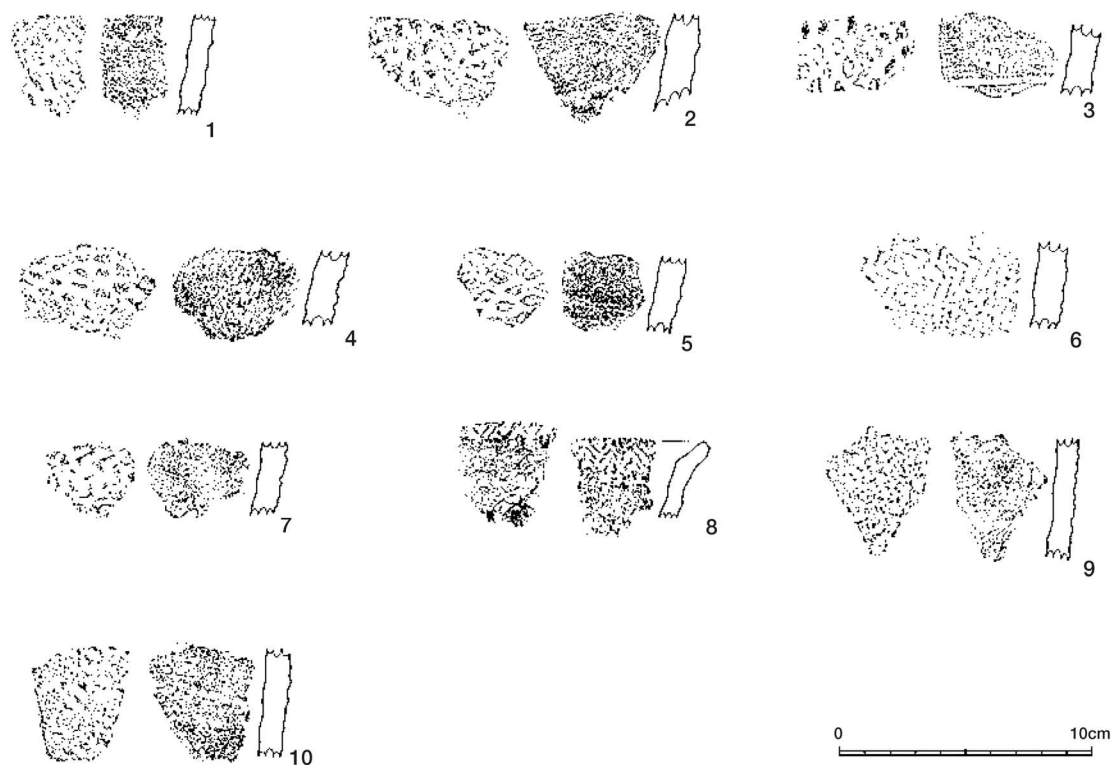
第27図にはそのうちの1基を図示した。Kr-Kb面での検出であるが、本来は縄文時代早期の包含層であるMB0から掘り込まれた遺構と推定される。様々なサイズの礫がまとまって確認され、その下部に細長いピットが位置する遺構である。ピットの埋土は周囲の地山との峻別が困難な土色であり、礫がない場合には、検出がほぼ不可能と思われるが、ATまで掘り込まれているケースでは確認可能である。土器や石器などの共伴遺物は確認できなかったが、周囲では押型文土器の分布がみられたこと、ピットに入っている礫の特徴が、縄文時代早期の集石遺構の礫と酷似することから、当該期に帰属するものと判断している。

その他の遺構として、今年度もB・C両区から炉穴が引き続き検出されている。E区からは、散礫とともに集石遺構が10基以上検出された。

(文責 松本 茂)



第27図 縄文時代早期の礫を伴う環状ピット群 (S=1/30)



第28図 縄文時代早期土器 (S=1/3)

B [早期の遺物]

本遺跡からは押型文土器を主体として、知覧式、無文土器がわずかながら出土している。出土分布としては、昨年度の概要報告で指摘されているとおり、台地縁辺部で古手の土器が出土し、押型文期になり台地中央部を利用し始める傾向がある。なお野首第1遺跡で見られるような、塞ノ神式に代表される早期後半期の土器は現状では確認されていない。知覧式に関しては、昨年度報告を行っているので、今年度は押型文土器を中心に報告を行う(第28図)。

本遺跡の押型文土器は大枠で2類に大別できる。

a) 1類

1～7の押型文土器が野首第2遺跡の主体となる早期の土器である。ナデによる器面調整の後に、粗大な押型文を施す。器壁は厚めである。楕円押型文が多く見られるが、山形押型文もわずかに存在する。集石遺構・炉穴ともにこのタイプの押型文土器が主体的に出土する。特に炉穴中より、この押型文土器のみが出土する事もあり注目される。

b) 2類

8は内面に稜を持つ押型文土器である。口縁部内面をケズる事によって稜を形成する。外面には縦方向に山形押型文を施文し、内面に縦方向の押型文を施す。

その他、特徴的な押型文として、枝回転押型文土器がある(9・10)。器面に条痕調整を施した後に、枝を回転する事により施文する土器である。具体的な位置付けが不明瞭な押型文であるが、野首第2遺跡の押型文の中でも、比較的薄手な器壁や赤褐色の色調など異彩を放っている。

C [後・晩期の遺物]

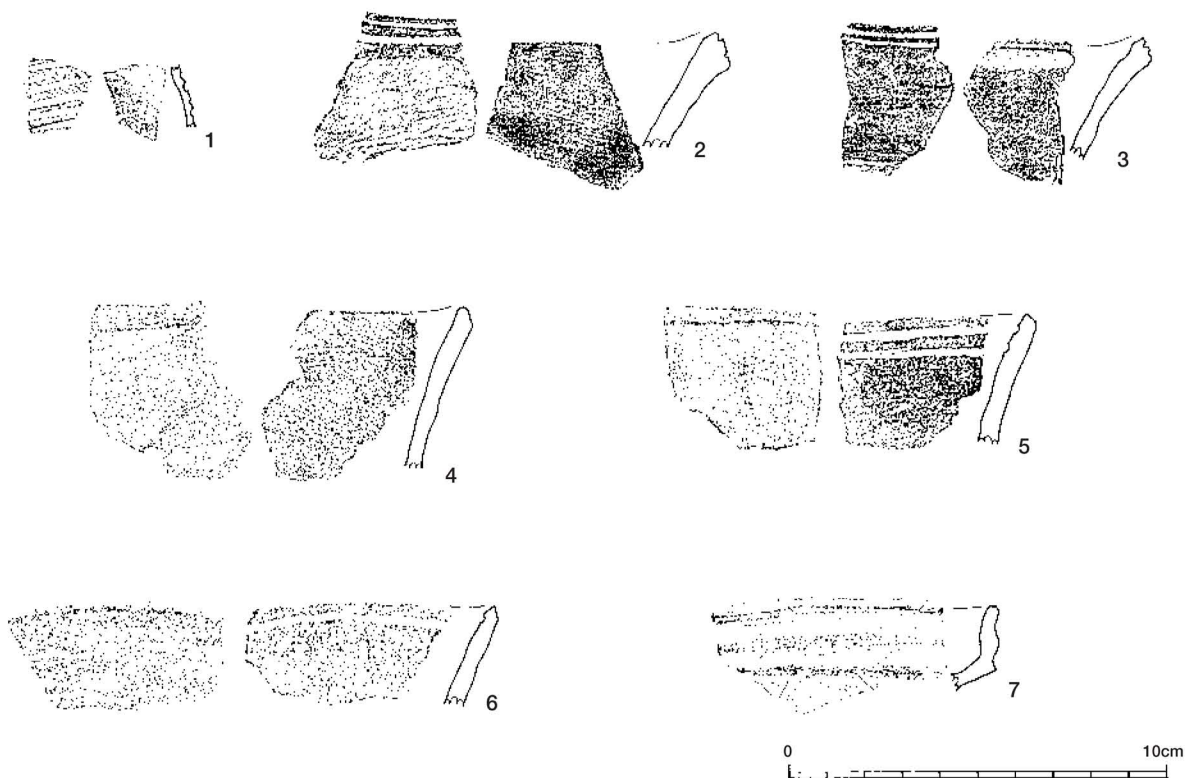
土器(第29図)

今年度は、包含層中から出土した縄文時代後期に該当する遺物に絞り報告を行う。

野首第2遺跡では丸尾式・西平式並行期・三万田式並行期・鳥井原式並行期の土器が出土している。以下、これら型式毎に説明を行う。

a) 丸尾式並行期

深鉢・台付皿でセットを構成する。昨年度の概報で台付皿を掲載している。



第29図 縄文時代後期土器 (S=1/2)

b) 西平式並行期 (1)

出土点数が少ないながら、西平式にわずかに類似した資料が出土している。ナデ・ケズリを主体とした調整が施されている。磨消縄文はわずかに見られるのみである。

c) 三万田式並行期 (2~6)

深鉢・注口土器・高杯でセットを構成する。多様な口縁部形態を見せるが、これが時間差を表すのか、同時軸上の個人差を表すのか判然としない部分が多い。本遺跡で最も多く出土している。

d) 鳥井原式並行期 (7)

凹線を意識するあまり、凹線間が肥厚する資料が多い。三万田式並行期と並び出土量が多い。

以上、後期後半の土器に絞って報告を行った。本文中でも触れた通り、当遺跡で主体となる土器型式は三万田式～鳥井原式並行期に該当するものと考えて差し支えあるまい。多数検出された住居も基本的にはこの時期に営まれていたのであろう。

全ての土器型式に共通する特徴として、欠落する器種の存在が指摘できる。また同一土器型式間

で胎土・調整が異なる資料も多く、集落の形成時期の問題と合わせ今後の検討を要する。

(文責 重留康宏)

石器 (第30図)

縄文後・晩期の包含層からは、石斧、石錘、磨石・敲石等、多量の石器類が出土した。今年度は特に打製・磨製石斧をとりあげて報告を行う。

打製・磨製ともに様々な形態を含む。磨製石斧と打製石斧いずれも、ほとんどが破損品で占められる特定の形態が確認された。破損の要因としては、完形品が使用中の破損、製作途上の破損、いずれの可能性も指摘できる。未掲載の資料には、推定される完成形よりひとまわり大きく、素材面を大きく残す、粗割り段階の未成品も多く見られる。また剥離調整・敲打調整・縁辺のツブレがみられる剥片も出土しており、石斧製作の過程を追うことができる。

打製石斧の成品には、上下対象の平面形を特徴とするいわゆる分銅形、基部と刃部の幅がほとんど変わらない短冊形、基部と刃部の境目に段を持ついわゆる撥形に近い資料、の3形態に大別できる。